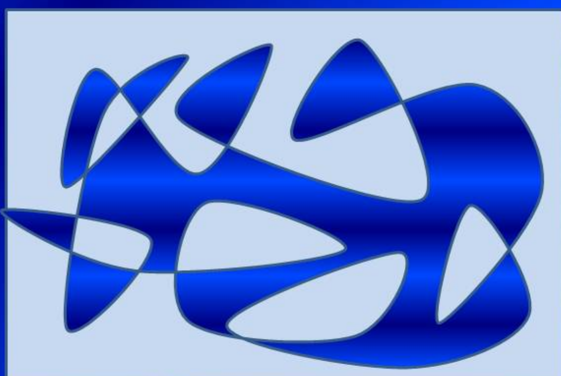
嫉妬

まつみのよろい



げんじあきら

目次

アガテ

○コンペティション

５月22日だった。暑い昼下がりだった。上空５０００メートルに冷たい空気が北から張り出して、竜巻を起こすかもしれないとテレビが言っていた。
桐内まつみは、15階のオフィスからガラス越しに空を見た。少し遠くに新宿の高層ビル群が見える。
さっきまで青空だったのに、一転して黒い雲に覆われている。
「帰りタイヘンになりそうですね」
隣に座っている赤木雄介も窓を見ていた。
まつみは返事をしなかった。
歩いてでも帰れるアパートなのだが、歩くといつも誰かが後からつけている気がして、慌ててコンビニに寄る。
歩いてでも帰れるのに電車で１駅乗る。中野から高円寺だ。
中野駅からオフィスのあるビルまでは表通りである。みんなの後を歩いていればなんでもない。高円寺の駅からアパートまでも、表通りである。なんでもない。
歩いて帰れるのに電車に乗るのは、なんだかおかしい。総務から、「定期のお金は難しいです」と言われて、自分でスイカを買っている。
こんな空の暗い日は、歩いて帰れない。
マカノクリエイトという会社に勤めている。桐内まつみは、デザイナーである。有名な４大を２年前に出て、マカノクリエイトに勤めている。６社からデザインの仕事を受けている。立派に戦力になっている。
「明日のコンペの準備はできてるんですか？」
外井三郎がデザイン室に入ってきた。
桐内まつみと赤木雄介の担当営業をしている。32歳で独身である。
「明日は一旦ここに来てください」
「９時です」
「９時30分に出ますから」

「わかりました」
「明日のことで相談したいんだけど」
「どうぞ」
デザイン室は広い。隣の赤井雄介だって、右隣の仕切りの向こうにいる。
赤井雄介は桐内まつみと同期である。インダストリアルデザイナーである。桐内まつみとコンビで仕事をすることも多い。
最近の会社は、自社で専門家を揃えない。扱いが難しいからだ。特別手当を要求されたりする。マカノクリエイトのような会社が流行である。
それだけに、目鼻のきく会社には、コンペを要求される。
大きな会社などは、広告代理店に丸投げしているところもあり、マカノクリエイトは、そんな広告代理店から発注を受けている。
マカノクリエイトは、業界６位の富士山堂と組むことが多い。明日のコンペも富士山堂と組んでいる。大手食品会社の北条食品が自社開発した原材料を使ってのダイエット食品を発売することになっている。
最も重要なコンセプトワークは、マカノクリエイトには依頼されない。マカノクリエイトはデザイナー集団である。コンセプトワークのセクションもあるのだが、知っている人は、誰も、マカノクリエイトにコンセプトワークを依頼しない。
明日の北条食品のダイエット食品も、海老名クリエイトの海老名一郎が担当している。まだ33歳で独身である。今回のコンペティションでは、富士山堂のリーダー格である。
「海老名さんから依頼されたパッケージ案の修正をしたのですか？」
海老名一郎は、桐内まつみに直接デザインの修正を依頼して外井三郎をイラつかせる。桐内まつみと外井三郎は、何度も海老名一郎と打ち合わせをしている。
桐内まつみは、パッケージ案を外井三郎に見せた。３案だ。
「明日は、海老名一郎さんから振られて、私が少し話して桐内さんに振りますからよろしくお願いします」
外井三郎は少し心配しているのだ。
「わたしは海老名さんのコンセプトはベストとは思いません」
直接海老名一郎には言わないが、外井三郎には言ってしまうのだ。

美人でアナウンサーのような桐内まつみの評判はいいのだが、常に、ビクビクしている。
海老名一郎に嫌われたら、仕事が減ってしまうのだ。
「おはようございます」
５月23日である。金曜日だ。昨日とはうってかわった５月晴れだった。
「９時30分に出ますから」
「わかりました」
「今日のコンペの相手はどこですか？」
「１社らしいけど知らない」
「行けばわかる」
八重洲の富士山堂の会議室に10時集合である。みんなでまとまって恵比寿の北条食品に伺う。
「や～桐内さんいらっしゃい」
海老名一郎が富士山堂の社員のように桐内まつみに言った。
「おはようございます」
「よろしくお願いします」
外井三郎は、無視されたかのように、何も言われない。桐内まつみは、外井三郎が自分からあいさつをすればいいのにと思ってしまう。
海老名一郎だって悪気があってやっているわけではないと思うのだ。どうしても、自分が目立ってしまうのだ。
「桐内さんいらっしゃい」
玉野久三が最初に声をかけたのも桐内まつみだった。
玉野久三は、富士山堂の営業課長である。
久野豊という担当営業がいるのだが、コーヒーを煎れているのだろう、すぐには姿を見せない。２年目に入ったばかりの新入社員である。
「11時から30分いただいているので、シミュレーションではないけど打ち合わせをしておきましょう」
「私たちはここにいる５名です」
「座り方は、海老名一郎さんを真中に、右に富士山堂と左にマカノクリエイトさんでお願いします」
「海老名一郎さんと桐内まつみさんは並んで座ってください」

「メモリースティックはまとめてあります」
「久野がパソコンと一緒に持って行きます」
久野豊がコーヒーを煎れてきた。桐内まつみは、いつも手伝う。
「久野さんお願いします」
久野豊は、パソコンを立ち上げていた。
「最初に私がプレゼンをさせていただくお礼を言います」
「すぐに海老名一郎さんを紹介します」
「桐内さんと外井さんと久野を紹介します」
「15分で終わるようにお願いします」
「15分は質問の時間になります」
海老名一郎は慣れている。時間をオーバーさせて、クライアントの北条食品のマーケと開発の担当者をイライラさせることはない。
「確認しますので順番にスライドを流します」
「最初に北条食品さんの今回のダイエット健康食品の意図をおさらいしています」
「ここは、山際聡子さんと何度も相談してありますので、ピントズレはないと思います」
「新しく開発したカロリーの少ない小麦粉です」
「これは北条食品の特許になっていて、他社は手が出せないようです」
「更に、北条食品のベイキングパウダーを使って大きく膨らませて、見た目での満腹感を誘います」
「味は基本的に塩ですが、ウズベキスタンの岩塩を使います」
「なんともいえないやさしい味になります」
「この真四角の個包装ですので、化粧をしながら手を直接触れないで食べることができます」
「カロリーは90カロリーです」
「１つ１００円で５つ入りです」
「パッケージは桐内さんが説明します」
桐内まつみは、淡々と説明した。
「この３案の中から選択されることが望ましいと考えています」
パッケージは、いつもモメてしまう。好みが人によって異なるからだ。

桐内まつみは、この１年、痛い目に会ってきた。できるだけクライアントに自分で選択していただくようにしている。
だから３案つくる。
「価格ですが、５００円になります」
「コンセプト調査をしてあります」
「ニーズ調査もしてあります」
「久野さんお願いします」
「１００人の女性に集まっていただきました」
「調査結果はコピーしてありますので、後ほど読んでいただくようお願いいたします」
「ポイントだけご説明します」
「仮のネーミングのオンナの朝ごはんには80％の方が共感されています」
「商品の意味を理解された方が80％でした」
「ダイエットに留意している方は73％でした」
「発売されたら購入すると答えた方は76％でした」
５人が北条食品に着いたのは、10時45分だった。早く着いても部屋がない場合があって、それも好ましくはない。
11時になってプレゼンルームらしい会議室に通された。桐内まつみは、北条食品ははじめてだった。
「今日は、当社のダイエット食品のプレゼンテーションに参加いただきましてありがとうございます」
「私はマーケティング１課の課長をしております真中至と申します」
「隣は、商品企画の課長をしております藪治です」
「隣は商品開発課長の峯下一樹です」
「そして右隣はマーケティング１課の今回のダイエット食品の担当ですが山際聡子です」
「どうぞよろしくお願いいたします」
実際にオリエンテーションをしたのは、山際聡子だけである。予算20万円の範囲内で、提案して欲しいとのことだった。
富士山堂チームのプレゼンは、順調に進んだ。
桐内まつみのパッケージの提案の時に、ちょっとしたことがあった。

「わたしは、ダイエットの奥に潜むウオンツのことを考えて、この３案をつくりました」
桐内まつみは、リハーサルでも、マカノクリエイトでも言ったことがないことを言ったのだ。
一瞬、山際聡子の顔が曇った。
質問は、コンセプト調査の結果に集中した。久野豊が大忙しだった。
そして予定通り11時30分には退席した。
玉野久三は、「１階で待っていてください」と言って、山際聡子に、資料を渡しに行った。
明らかに、次のプレゼンテーションをどこが行うのかを見に行ったのだ。
「グッドジョブだった」
「宣伝広告オリエンテーションを26日の月曜日にやってくれと言われた」
「箸にも棒にもかからないわけでもなかった」
「明日土曜だけど富士山堂に10時でお願いします」
「枚川久則さんが宣伝広告案をつくっていますから、みんなで検討したいと思います」
桐内まつみは、アナと雪の女王のチケットを買ってあった。帰りにキャンセルに行く。
夕方18時になって、山際聡子から玉野久三に電話があった。
「全面的に富士山堂の案でやることにしました」
「パッケージだけはグッドジョブのパッケージを使ってください」
「グッドジョブさんには納得いただいて了解もとってあります」
「三光クリエイトさんですのでよろしくお願いします」
「したがって、広告宣伝のプレゼンは富士山堂さんだけになります」
玉野久三は喜んだ。自分の販売目標が、今季前半で半分はクリヤーになる。
気がかりはパッケージだった。三光クリエイトとは組んだことがない。
「海老名さん喜んでください」
「全面的に富士山堂が仕事を受けることになりました」
「月曜日の宣伝広告のプレゼンも富士山堂だけになりました」
「おめでとうございます」
「ちょっと相談があります」

「パッケージデザインをグッドジョブと一緒に提案した三光クリエイトを使ってくれなんだけど」
「桐内が余計なこと言うからだ」
「あんなコンセプトに近いことをなんで言ったんだ」
「山際聡子がカリッときた」
「桐内の手配で三光クリエイトが動くかどうか探ってみるからちょっと待ってください」
「玉野さんは山際聡子をおさえてください」
「わかりました」
20時になって、やっと説得できた。山際聡子を説得することがタイヘンだった。
「生意気とかそういうことではなくて、三光さんのデザインが似合ってる」
こう言い張ってきかなかった。
多分、桐内まつみのデザインの方がおいしそうでダイエットに効きそうだろうと想像できる。
「21時に玉野さんが来るそうです」
「なにかあったんですね」
「赤木さんが牛丼テイクアウトに行ってますから」
外井三郎は、玉野久三から電話を受けていた。桐内まつみに伝えようがないのだ。
「桐内まつみ」
「みんなを困られせるな」
「コンペは勝ったのだが、パッケージだけ三光クリエイトを使えと山際聡子が言い張って私と玉野さんは必死で動いた」
「三光クリエイトの山野辺ありさを桐内まつみ手配で動かすことにした」
「もうすぐ玉野さんが桐内のところに行って話をする」
「桐内が余計なことを言うからだ」
「デザイナーだからデザインのことだけを話せばいい」
「みんな三光クリエイトが会社として入ってきたらやりにくい」
「桐内が蒔いた種だから自分で刈り取れ」
海老名一郎からの怒りのメールだった。

桐内まつみのほほをなみだが伝わった。

○広告宣伝のプレゼン

５月24日だった。

５人と牧川久則が富士山堂に集まった。

「昨日はわたしの不謹慎な発言でみなさんにご迷惑をおかけしました」

「わたしはこれから三光クリエイトの山野辺ありささんと相談してきます」

「よろしいでしょうか」

だれも、返事をしなかった。

桐内まつみを誰も怒れないのだ。

５人は、三光クリエイトの山野辺ありさが昨日提案したパッケージ案を知らないのだ。見ていない。もしかしたらストーリーが異なるかもしれない。

緊急なのだが、桐内まつみが、山野辺ありさのデザインの手配をすることを承知したのかどうか、はっきりさせないといけなかった。

桐内まつみは、品川に急いだ。

待っていたのは、山野辺ありさだけだった。グッドジョブは、北条食品のダイエット食品のコンペで負けたのだ。もう次のコンペの仕事に向かっている。山野辺ありさだけが、多分儲けの少ないパッケージの仕事をすることになっているのだ。

「この３案提案して、決まったのが、これです」

「６個入りですか？」

「６００円にしてくれですけど」

左右３個づつの６個入りの薄い紙箱だった。

桐内まつみのデザインは、５個下から積んであった。

決定的に異なっているのは、桐内まつみのデザインは、個包装も紙箱もオレンジ系の配色だった。山野辺ありさのデザインでは、ピンクになっていることだ。

瞬間的に、海老名一郎は、このピンクを嫌うと思った。

しかし、ここで修正することはできない。すべては山際聡子が握っているのだ。

「メーカーと相談していますか？」
「サンプルをつくっていただいていますから」
「マカノクリエイトのメーカーに移してもかまいませんか？」
「かまいません」
「デザイン案はメーカーから出ていませんか？」
「わたしのデザインです」
山野辺ありさは、ムッとしたように言った。
「それでは、このデザインの見積をいただけますか？」
「マカノクリエイト宛ての見積です」
「承知しました」
桐内まつみは、急いだ。
まだ広告宣伝の打ち合わせをしているはずである。
「ピンクをオレンジに変えられないんだろうか」
予想どおり、海老名一郎が言った。
海老名一郎は、部屋を出て電話をした。
多分、山際聡子である。
「失敗した」
「山際聡子は玉野さんに任せておけばよかった」
「どうも山際聡子は私とか桐内に抵抗がある」
「月曜日に宣伝広告のプレゼンやりますから、その時に、話していただけませんか」
「話してみます」
玉野久三は、気乗りしないといった態度だが承知した。
「午後からスライドつくりに入ります」
「ここで作業します」
「パッケージのスライドはもらってきましたか？」
「いただいてきました」
「三光クリエイトととはどういう取引になるのですか？」
「まだ外井さんとも相談していませんが、三光クリエイトから今回のデザインの見積をいただくことにしました」
「マカノクリエイトが三光クリエイトに外注したスタイルですか？」

「メーカーはマカノクリエイトの会社で行います」
「責任はマカノクリエイトになります」
「わかりました」
外井三郎が代表して返事をした。
外井三郎も桐内まつみを怒れないでいる。確かに余計なことを、桐内まつみは言ったのだが、デザインの品が違うのだ。
「弁当を用意しましたので、ここでお願いします」
久野豊が弁当を運んできた。
桐内まつみは、お茶を煎れに行った。
桐内まつみは、15分で話せるスライドがつくられていく様を、じっと見ていた。もう桐内まつみが口を出す局面はない。
テレビコマーシャルは22歳のハーフのタレントらしい。まだ確認はとっていないのだろうが。
ピンクのパッケージのダイエット商品がでてきて、「似合わないな～」と海老名一郎が言った。
「オンナの朝ごはんを商品名にしてたんだけど～オンナの朝ごはん～なになにしないとおさまりがよくないな～」
「桐内さんなにかありませんか」
「アガテ」
「オンナの朝ごはんアガテか」
「フランス風になるんだ」
「玉野さん至急に商標を調べていただけませんか」
玉野久三は、慌ててドアから出ていった。今日決めないといけないのだ。
「ちょっと考えますから１時間休憩させてください」
まだ14時だった。
明らかに、海老名一郎は、アガテに混乱していた。ハーフのタレントがフランスのハーフであることも混乱した。
「桐内さんはアガテだとずっと思ってたのか」
「ええ」
「どうして言わなかったんだ」
「わたしはデザイナーですから」

玉野久三は１時間経って帰ってきた。
「大阪のおかしの会社が持っていますが、交渉して、使わせてくれるそうです」
「お金は？」
「使う予定がないから」
「タダですか？」
「今回の加工小麦を北条食品が供給する約束です」
「北条食品は了解ですか？」
「原料は多く売れた方がいいから」
「わかりました」
「すみません～明日また10時に集まっていただけませんか」
「私は少し考えたいことがあります」
「それから今晩コマーシャルの動画コンテをつくってきますから」
「よろしくお願いします」
「山際聡子さんはアガテを了解ですか？」
「自分で大阪の会社に電話しましたから」
「桐内の案だというのは伏せますから」
「わかりました」
６人が暗黙に承知した。
桐内まつみは、中野のマカノクリエイトに帰って自分の席に座って、ドッと疲れが出ていることがわかった。
「グッドジョブが勝っていたら、わたしが桐内さんを手配させてもらっていたかと思うと残念です」
「見積を送らせていただきます」
山野辺ありさからの見積書が送られてきていた。
更に暗い気持ちにさせた。
「どうでした？」
「注文いただきました」
「勝ったんだ」
「わたしは負けました」
「どういうことですか？」

「パッケージだけは三光クリエイトを使ってくれ」
「桐内さんのはいいと思ったけど」
「わたしが余計なことを言ったから」
「赤井さんは忙しいんですか？」
「モデルが上手く上がらないんです」
「設計が上手くないのか３Ｄプリンターからうまくつくれないんです」
「ガンバってください」
同じデザイナーでも、赤井雄介と桐内まつみは、まるで分野が異なっている。桐内まつみには、３Ｄプリンターなど、さっぱりなのだ。
「桐内さんが言いたかったことはなんですか？」
外井三郎が昨日のことを持ち出してきた。
「もういいです」
「オレはオンナがよくわかんないな～」
「オトコとかオンナとか関係ないです」
「なんなんだ」
「わかりません」
「今日はもう疲れましたから失礼します」
「ああ～どうぞ」
桐内まつみは、早く帰ってシャワーをしたかった。コンビニでビールを買って帰ろうと思った。
まだ16時である。
まるで真昼のようである。
桐内まつみは、歩いて帰ることにした。途中のコンビニのイメージがあった。このコンビニは、逃げ場所なのだが、今日は真昼のようである。
コンビニが見えた時、桐内まつみは、いきなり強烈な眠気に襲われた。おかしいと思ったのだが、どうすることもできない。コンビニまでトボトボと歩いた。
コンビの端の机と椅子に座って伏せた。バックは背負ってる。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫ですか？」
桐内まつみは状況が飲み込めなかった。

「もう30分もこのままなので、救急車でも呼ぼうと思ったんですけど」
平気かどうかわからなかった。立ち上がってみた。気分が良くなっていた。襲っていた眠気もない。
「ありがとうございます」
「ちょっと気分が良くなかっただけです」
缶ビールを２本買った。パスタとサラダを買った。
「助かりました」
「どうもありがとう」
桐内まつみは、疲れたのだと思った。昨夜は眠ったのか眠ってないのかよくわからない。ただ悔しいのだ。なにが悔しいのかよくわからない。悔しさの先に、山際聡子がいることは確かなのだ。
コンビニを出て通りの反対側から誰かが自分を見ていた。一瞬である。桐内まつみも見ていた。大きな帽子をかぶっていた。オンナだ。
桐内まつみは歩きはじめた。大きな帽子のオンナも反対側に歩きはじめたように見えた。
べつに気になるようなことではない。
「明日ですけど、一旦会社に行きますか？」
「直接八重洲にしましょう」
「わかりました」
外井三郎は、まだ会社にいるようだった。
「昨日からさっきまでスライドをつくっていましたから、明日のリハーサルのつもりで話します」
まだ久野豊と桐内まつみが、コーヒーを配っている時に、海老名一郎が話しはじめた。
「商品名ですが、オンナの朝ごはんアガテにしました」
「桐内まつみの案ですが伏せてください」
「３分の動画コンテをつくったので見てください」
遠くにモンサンミッシェルがかすかに見える草原のホテルで、フランスと日本のハーフのタレントが朝食をしようとしている。
「アガテにしてください」
「アガテは90カロリーしかありませんが」

「かまいません」
「岩塩でしか味付けしてありませんが」
「かまいません」
「新しい小麦粉ですけど」
「かまいません」
フランス語でテロップが入る。
そして、イケメンウエイターが、アガテを持ってくる。
「おいしい」
すべてフランス語である。
桐内まつみも素晴らしいと思った。
このようなコンセプトの表現を見たことがない。
気になったのは、パッケージがピンクはピンクなのだが、ほぼクリーム色のピンクになっていることだ。モンサンミッシェルを遠くから見ると見える色だ。
「モデルは誰ですか？」
「うちの社員です」
「ウエイターも社員です」
「うちのスタジオで撮りました」
「パッケージの色が淡くなってるけど」
「玉野さんが山際聡子を説得してください」
「オンナの朝ごはんは小さくしています」
「アガテを大きくしてください」
「パッケージもです」
「山際聡子に確認をとってください」
「今日中に新しいものを手作りしてください」
「夜撮影します」
「アガテを大きくしてください」
「フランス語ですか？」
「表がフランス語で裏が日本語です」
「この３分の動画のプレゼンでいけると思っています」
「コマーシャルをいつから入れるかについて枚川さんからお願いします」

「見積もお願いします」
「わたしパッケージ作りますので」
桐内まつみは、外井三郎をうながして外に出た。
「やるでしょ？」
「やるしかない」
「山野辺ありさは怒るかもしれないけど」
「いくら請求されたんだ」
「20万円」
「払うんだから文句は言わないだろう」
「なにがいい？」
「ピザ」
「テイクアウトして行くから先にやってて」
「わかりました」
桐内まつみには、もうイメージがあった。
何かが足りないとは思っていた。
アガテが主役なのだ。主役がなかったのでしっくりこなかった。
基本的にピンク系統を外したら、山際聡子に怒られる。ただ商品名をアガテに変えていて、山際聡子も了承している。パッケージが変更されることは知っているはずである。遠くから見るモンサンミッシェルの色には説得力があるだろう。
桐内まつみは、一気にデザインをした。描きなぐるように描いた。アガテのロゴを決めないといけないと思った。
「もしもし」
「海老名さんですか？」
「どうしたのですか？」
「アガテのロゴを決めないといけないんですが」
「案がありますか？」
「今送ります」
「お願いします」
海老名一郎はトッピな案は選択しなかった。フランスでモンサンミッシェルである。品が少しは必要だがデフォルメしないと商品にはならない。

「桐内さん買ってきました」
「ありがとうございます」
「おいしそうなピザです」
「少し遠くまで行ってきました」
「いくらですか？」
「今日は私のおごりです」
「ありがとうございます」
「飲み物何にしますか？」
「冷たいものありますか？」
「缶ですけど」
「かまいません」
桐内まつみは、外井三郎を見ないで話している。アガテをデフォルメしているのだ。
「どうしますか？」
「いただきます」
桐内ますみはやっと外井三郎を見た。
「デカイピザ」
「どうぞ～」
桐内まつみはデカイピザを急いで食べた。
時間がないのだ。
「桐内さんは普段は外食ですか？」
こういう時の外井三郎はジャマである。
いつもこうなる。
桐内まつみの頭はそれどころではない。
生返事で外井三郎をガッカリさせるかもしれないとは思ったのだが、桐内まつみはアガテのデフォルメのことを考えていた。
「これどうですか？」
「もうこんなことやってるんですか？」
「ロゴですけど」
「確かに決めないといけない」
「今最終の案を描いています」

「ピザどころじゃないな～」
「後でチンしていただきますので」
「海老名一郎さんとは相談しているのですか？」
「ええ」
「コーヒー煎れておきますから」
「ありがとうございます」
14時になった。
「もしもし」
「桐内？」
「まだ？」
「今送ります」
「パッケージ全体もすすめて」
「承知しました」
桐内まつみは一心不乱にパッケージを描いた。
18時になった。
「もしもし」
「海老名さんですか？」
「ええ」
「今から送ります」
「待っていますから」
遠くで外井三郎が見ていた。
「ピザ温めてきますか？」
「わたしやります」
「温めるだけだから」
桐内まつみは黙って外井三郎に任せることにした。
明日の北条食品の広告宣伝のプレゼンに自分も参加するのか聞いていない。
「どうぞ」
「いただきます」
「ええ」
「冷たい飲み物です」
「ありがとうございます」

桐内まつみはペコペコになっていた。

20時になった。

「もしもし」

「桐内？」

「ハイ」

「このパッケージでいいから」

「これから朝まで３分の動画プレゼンスライドをつくるから」

「わたしは？」

「今日はもういい」

「明日富士山堂に10時に来てくれ」

「わたしも一緒に行くんですか？」

「もしパッケージの修正があったらいけないから」

「わかりました」

「なんだって言ってました？」

「今日のところはこの案でいいそうです」

「明日は？」

「富士山堂に10時に来てくれ」

「北条食品は？」

「パッケージの修正があったら困るので」

「行くんだ」

「じゃ～９時30分にここに来るか」

「わかりました」

「じゃ～今日は用事あるから先に帰ります」

「おつかれさまでした」

桐内まつみはコーヒーを煎れに行った。

インスタントでいい。

社内から電話が鳴った。

まだ誰か社内にいるのだ。

席まで戻ったところで音が消えた。

給湯室へ戻ってコーヒーを煎れた。

夜でイヤなのだが早く帰りたかった。歩いて帰ることにした。

コンビニが見えたところで膝がガクンと落ちた。強烈な眠気が襲ってきた。歩けないのではないかと思った。
やっとコンビニの机にたどりついた。そして伏せてしまった。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫ですか？」
「２回目ですけど病院行った方がいいです」
「30分眠っていました」
「運転手さんが言っていました」
「ヨロヨロしてて跳ねそうになったって」
「どうもすみません」
桐内まつみは、パスタとサラダとビールを買った。申し訳ないと思う。何があったのか自分でもよくわからない。
傷心してアパートのドアを開けたとき、写真が１枚落ちてきた。ドアに挟んであった。
桐内まつみがコンビニのテーブルで伏せている写真である。
これはタイヘンなことだ。
桐内まつみは、一瞬でパニックになった。
鍵をして座椅子に座って放心状態になった。
どういう意味なのだろう。まったく理解できない。
この写真は誰が撮ったのだろう。自分の衣服から前回のコンビニの写真である。
落ち着かないといけない。
誰かが自分のアパートを知っている。この写真をドアに挟んだ。
狙われている。以前から誰かがつけている気配がしていた。
ビールを開けてパスタを電子レンジで温めた。サラダを食べた。じっとしていたらとんでもないことを考えてしまう。
「おはようございます」
５月26日である。
富士山堂に６人が集まった。
「11時に恵比寿の北条食品に伺います」
「さっきまで編集していました３分の動画プレゼンを見てください」

海老名一郎は、あいさつもなく着替えをしながらエンターを押した。
眠っていないのだろう。ヒゲも髪もあたっていてシャワーもしてきているのだろうが、目が腫れぼったい。
15秒と30秒と60秒のテレビコマーシャルが流された。
遠くにモンサンミッシェルがかすかに見える草原のホテルで、フランスと日本のハーフのタレントが朝食をしようとしている。
「アガテにしてください」
「アガテは90カロリーしかありませんが」
「かまいません」
「岩塩でしか味付けしてありませんが」
「かまいません」
「新しい小麦粉ですけど」
「かまいません」
フランス語でテロップが入る。
そして、イケメンウエイターが、アガテを持ってくる。
「おいしい」
すべてフランス語である。
聞いていたコンテのとおりだった。
雑誌での訴求事例がスライドで説明されて、ネットメディアでの表現や方法が説明された。
かなりの露出が計画されているが、問題は予算である。枚川久則が説明をした。
「海老名さんありがとうございました」
「バッチリです」
「出かけましょう」
「今日は海老名さんと枚川さんが中心ですので前に座ってください」
「外井さんと桐内さんと久野と私は、後に並んで座ってください」
玉野久三が１点だけ気になっていることは、桐内まつみのことである。
山際聡子が、「パッケージは三光クリエイトにしてください」と言ったことだ。
もし桐内まつみに嫌な感情を持っていれば、今日の宣伝広告のプレゼンにも

影響を及ぼす。

11時10分前に恵比寿の北条食品に着いた。

「プレゼンルームで少々お待ちください」

久野豊がアッという間にパソコンを繋いでプレゼンの準備を終える。

ピッタリ11時に北条食品の４名がプレゼンルームに入ってきた。

「お忙しいところ我々の商品のためにプレゼンの準備をしていただきましてありがとうございます」

「早速ですが、お聞きしたいと存じます」

「今日は時間をいただきましてありがとうございます」

「海老名一郎と枚川久則が説明いたします」

「よろしくお願いいたします」

玉野久三は、海老名一郎と枚川久則だけを紹介した。できるだけ桐内まつみを表に出さないつもりだとわかった。

「最初に３分の動画をつくっておりますので、ご覧いただきたい」

海老名一郎は、それだけ言うと３分の動画をスタートさせた。

「続きまして、パンフレットです」

「今回は山際さまにも協力をいただきましてアガテを使えるようになりましたので、アガテを前面に押し出しています」

「ネットメディアの広告も重視しています」

「雑誌の広告では更にアガテの詳しい内容を説明しています」

次に予算のご説明をさせていただきます。

枚川久則が全体の予算の説明をした。15分かかった。

「私どもの本日のプレゼンテーションは以上のとおりでございます」

「ご質問がありましたらお願いいたします」

質問は、コマーシャルの予算のことに集中した。

多分、描いていた予算を超過しているのだと思える。

しかし、いずれの案も捨てがたいと感じたのだろう。

「ここは今後具体的に詰めを行うことにします」

「それでは、スケジュールを説明させていただきます」

マーケティング１課の課長の真中至が、ペーパーを配った。細かく書かれたスケジュール表だった。

「生産開始が８月１日です」
「出荷が９月１日です」
「全国一斉に出荷します」
「卸はマイフレッシュさん１社です」
「出荷数は初回80万箱です」
「日産20万箱です」
「７月22日からのマイフレッシュさんの展示会には北条食品として出展しますのでみなさんにもご協力をお願いいたします」
「７月22日までには、コマーシャル映像も含めて、展示会の映像も含めて、すべてを完成させていただきたいと存じます」
いきなり、すごいタイトなスケジュールになったのだが、よくあることだと、桐内まつみは思った。
それにしても、パッケージが変更されていることについて、誰も質問しないのだが、これでいいのだろうか。桐内まつみは不安である。１度も山際聡子の顔を見ていない。
「とりあえず富士山堂に帰っていただきたい」
「弁当を買っていきますからそのままお願いします」
また集まるのはタイヘンなのだ。
「どうぞ」
久野豊が買ってきた弁当をみんなに配った。
桐内まつみは給油室からお茶を持ってきた。
「パッケージは間に合いますか？」
玉野久三はスケジュールが心配なのだ。
「パッケージはかなり変更になってるんですけど、あれでいいんですか？」
桐内まつみは、弁当どころではないのだ。
「もしもし」
「山際さんですか？」
「先ほどはありがとうございました」
「アガテにしてパッケージもかなり変更したのですが、了承していただいたでいいのでしょうか」
「あの女をわたしに会わせないようにしてください」

「それだけですか？」

「ええ」

「わかりました」

玉野久三は、みんなに話しておいた方がいいと思った。

「桐内さんに会いたくないそうですが、パッケージはプレゼンの内容でいいそうです」

不審な出来事

○レッドカード

５月27日になった。
桐内まつみは、もうここのところ仕事を休んだ覚えがない。
ずっと働いているのだ。
今日は休みたいのだが、パッケージが間に合わないかもしれない。
王内紙業に出かけないといけない。
「パッケージのスケジュールを送ってください」
「今日の夕方送らせていただきます」
急がないといけないのだ。
八王子まで少しかかる。桐内まつみは電車でスケジュールを書いていた。
「桐内さんごはん食べました？」
外井三郎は、ピントがズレていることが多い。
「平気です」
「八王子でなんか食べますか？」
「わたしはいらないです」
桐内まつみは、外井三郎には、はっきり言わないといけないと思っている。
80万箱のパッケージを生産するには、いつ生産にかかればいいのだろう。
７月22日のマイフレッシュの展示会がエンドだ。パッケージ１万を７月15日までに北条食品の宇都宮工場に送れということになるだろう。確かめないといけない。
通常、展示会では、ダミーでデザインだけを用意して、印刷のない箱で試作品を包装することもあるのだが、今回は、完全にしてくれと言われると思った。
そして８月１日生産開始だから、７月20日に80万箱のパッケージを送ってくれというだろうと思った。
とにかく、泊り込んでも至急にパッケージの試作を仕上げないといけない。
外井三郎は、八王子駅の売店でパンと飲み物を買った。

「いらっしゃい」

社長の王内次郎が車で待っていた。

「制作をやってくれる王内よしこです」

桐内まつみも外井三郎もはじめてだった。

「娘さんですか？」

「今年出たばかりです」

「デザイン学校ですか？」

「ええ」

「よろしくお願いします」

「女性用の商品なのでいいかと思いまして」

「よろしくお願いいたします」

八王子駅から北に２キロくらいのところにある工業団地にある。

「すぐまいりますから少々お待ちください」

「会議室に通された」

「外井さんパン買ったんじゃないんですか？」

「あんな美人がいたんじゃ困ります」

桐内まつみは笑ってしまった。

工場長の三山明がやってきた。

「桐内さんは相変わらずキレイだな～」

「楽しみですよ」

「何も出ませんけど」

王内次郎と王内よしこが入ってきた。

「お忙しいところありがとうございます」

「早速ですが、オンナの朝ごはんアガテの３分の動画がありますので、それを見ていただけますか？」

この海老名一郎の編集した３分のビデオはわかりやすい。

「この３分の動画をいただけますか？」

桐内まつみは外井三郎を見た。

外井三郎は王内よしこを見た。

「メモリースティックありますか？」

王内よしこはすぐに差し出した。

桐内まつみは、すぐにメモリースティックにコピーして渡した。
「ありがとうございます」
「映像にありましたパッケージです」
「この案はわたしの案ではないのですが、いろいろありまして、この案になっています」
「細かいところは別にして、基本的には、変更できないと思っていただきたいのです」
「こっちが個包装です」
「こっちが６個入りの紙ケースです」
「表示の細かい部分も書いてありますのでよろしくお願いします」
「スケジュールですが、７月22日にアガテの全国卸をやっていただくマイフレッシュさんの東京展示会がありますので、そこでは、量産に近いパッケージが１万くらい必要だと思っています」
「北条食品さんの足利工場での生産は８月１日からで、出荷は９月１日からです」
「９月１日は80万箱を全国一斉に出荷します」
80万箱という数に驚いた。
「日産は20万箱の予定になっています」
「納品先は北条食品の足利工場ですか？」
「そうです」
「多分、７月20日には足利工場に80万箱のパッケージを入れないといけないと思います」
「最も急ぐのは試作の制作です」
「明日は桐内さんは来れますか？」
「明日も明後日も来れます」
「今日は私どもの社内で相談させてください」
「スケジュールが欲しいのですが」
「今日の17時に送らせていただきます」
「明日はまた朝からおいでいただけると助かります」
「承知しました」
「それでは今日はこれで中野に帰ります」

「スケジュールをお待ちしています」
まだ11時だったが、タクシーを呼んでもらって、八王子の駅に向かった。
八王子の駅で外井三郎は食べ物屋を探した。
「中野で食べませんか？」
「わかった」
「電車乗ります」
「わかった」
「外井さんは今日は何も言いませんでしたけどいいんですか？」
「グッドだ」
「そうですか」
「お前赤木雄介と付き合ってるのか」
いきなりですごい質問だった。
「どうしてですか？」
「金曜の社内合コンで話題になってた」
「社内合コンとかあるんですか？」
「桐内さんには誘いはないだろうけど」
「それで？」
「赤木はイケメンだし仕事もできる」
「桐内まつみに喰われたんじゃないかって言ってた」
「誰がですか？」
「みんな」
「みんなって～合コンの出席者ですか？」
「何人ですか？」
「６人」
「オンナ３人がずっと赤木と桐内の話ししてた」
「正直オレはおもしろくなかった」
「どうなんだ」
「同期だからごはん行ったりしますけど」
「それだけです」
「どうしてそんなうわさになるのかわかりません」
「お前がキレイだから」

外井三郎は、桐内まつみに対して一貫性がない。
お前と言ったり桐内さんと言ったりする。その時々で変わる。
「わたしはどうすればいいんですか？」
「あんまり恋人っぽくするな」
「していません」
「みんなはそう見てる」
「手をつないだこともありません」
「あんまりうれしそうな顔するな」
「赤井雄介もよくない」
「桐内と話してるとうれしそうな顔をする」
桐内まつみは、牛丼をテイクアウトして会社で食べることにした。
「オレもそうする」
「わたし今日の話をメモにしてみなさんに送ります」
「お願いします」
「明日はどうしますか？」
「オレも八王子に行く」
「外井さんは赤井さんとの仕事はないんですか？」
「ある」
「明日も大丈夫ですか？」
「平気だ」
「よろしくお願いします」
14時だった。
桐内まつみから、八王子の王内製紙訪問のメモが、王内製紙の３名とアガテチームの５名とＣＣで外井三郎宛てに送られた。
スケジュールの返事が夕方にいただけると書いてあった。
そして18時に、再度、桐内まつみからメールが送られた。
王内よしこから送られてきたエクセルのスケジュールをそのまま送った。
試作完成が６月１日になっていた。
７月15日１万箱のサンプル完成。
７月20日８万箱の初回納品である。
別添で、１万箱のサンプルの見積書と本生産の製品見積書が添付されてい

た。
「７月15日納品の１万箱については、桐内が予想してスケジュールに組み込んでいただきました。無地箱などで対応されるのでしたら、至急にお知らせいただきたい」
「見積ですが、マカノクリエイトが責任を持ちますので、10％上乗せをさせていただきます」
「マカノクリエイトから北条食品さんへの見積書を添付させていただきました」
「正式見積書は、別途社長捺印の後、送付させていただきます」
桐内まつみの仕事は完璧である。
しかも早い。
「落ち着いたのですか？」
赤井雄介の言葉に驚いた。
近くにはいたのだろうが、まったく気がつかなかった。
「いろいろあったけど、今日のところはなんとかなったかな」
「赤井さんの仕事はどうなんです？」
「いろいろ」
「１時間くらい付き合ってください」
「ごはんですか？」
昼間に外井三郎から牽制球を投げられているのだが、１時間一緒にごはんを食べるくらいと思った。
「出ますけど」
「いつものところですか？」
「ええ」
「先に行ってください」
「どうしたのですか？」
「ちょっと気分がよくないんです」
「大丈夫ですか？」
「30分後に行きます」
赤井雄介は、心配そうな顔して先に出かけた。中野駅の近くのおでん屋さんである。

桐内まつみは眠ってしまっているのだ。これで３回目である。トイレから帰ろうとしたらガクンと足にきた。慌てて自分の机に伏せている。
もうろうとしているのだが、考えないといけない。
３回とも給湯室のインスタントコーヒーを飲んでいる。直前である。
デカボトルではない小さいボトルである。メーカー品である。
「桐内さん大丈夫ですか？」
「桐内さん」
外井三郎の声だった。
桐内まつみは、慌てて時計を見た。19時30分だった。多分、30分眠った。
「お先に失礼します」
バッグを背負って投げ出してあったスマホも持った。
「大丈夫ですか？」
「平気です」
桐内なつみは、エレベーターのボタンを押した。
そして少し走ってみた。平気そうだった。
「走ってるからちょっと待ってて」
「大丈夫か？」
まだいてくれた。
おでん屋さんの手前のスーパーに飛び込んだ。
コーヒーの売場を探した。コンビニの方が急いでいる時は適している。
慌てて外に出てコンビニに飛び込んだ。
インスタントコーヒーのスティックを買った。しばらく給湯室のコーヒーを使わないことにしようと思った。
「ゴメン～申し訳ない」
「大丈夫ですか？」
オトコは誰でもが、オンナはいろいろあるからと思っている。心配そうである。
「ビールと～ダイコンとこんにゃくとたまごとちくわとタコお願いします」
「食べられるんですか？」
「ペコペコ」
赤木雄介は、まったく理解できないという顔をしていた。

「赤木さんは仕事のことで悩んでいるんですか？」
「どうして？」
「さっきそんな感じしたから」
「クライアントがなかなかデザインにＯＫ出してくれない」
「もう４回もやってるんだけど」
「なんで？」
「しっくりこない」
「外井さんは何だって言ってるの？」
「ただ困ってる」
「コンペになってるの？」
「いいや」
「仕事はそれだけ？」
「もう１つやってる」
「そっちは？」
「うまくいってる」
「桐内さんも～コンペ相手のデザイン会社使ってくれって言われたんでしょ？」
「外井さんから聞きました」
「理由はなんですか？」
「わかんないから悩むんじゃない」
「カンパイしよう」
「いただきます」
赤井雄介はもう出来上がっていた。
会社から電話だった。
桐内まつみの部屋に１台しかない代表からだった。
「もしもし」
「もしもし」
「どうしたんですか？」
「わたしたちの部屋から電話」
「出ないんですか？」
「向こうからかかってるんでしょ？」

「うん」
「もしもし～桐内です」
「どうしよう」
「切ってみれば」
「こっちからかけてみれば？」
「もしもし」
誰も出なかった。
「うちの部屋少ないからな～」
「誰がかけてきたんだろう」
「あんまり気にしない方がいいと思うけど」
気にしないといっても～間違える状況ではない。誰かが電話してきたのだ。
５月28日になった。
桐内まつみは、コンビニコーヒーにした。
コーヒーがスキである。毎朝給湯室からコーヒーを煎れてくる。お昼も３時も帰りもである。
今日は朝はコンビニコーヒーにした。
「おはようございます」
「おはよう」
机の真ん中に赤いポストイットが貼ってあった。
「誰か来ました？」
「誰も来なかったけど」
これはレッドカードだと思った。
誰かがやっている。多分、昨日の夜赤井雄介とごはんを食べたことだ。
おかしな電話といいレッドカードといい、同じ誰かがやっている。
「コンビニコーヒーにしたんだ」
「今日はね」
しばらくして外井三郎がやってきた。
「大丈夫か？」
「平気です」
「何かあったのですか？」
赤井雄介が口をはさんだ。

昨日伏せていたのを知っているのに、鈍感だと思ってしまう。

バックを背負ってスマホを持ってコーヒーを持って立ち上がった。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

中野駅だった。

「電話じゃないのか」

「もしもし」

公衆電話からだった。

「もしもし」

「電車乗るけど」

桐内まつみは、そのまま電車に乗った。

「もしもし」

「どうしたんだ」

「公衆電話」

「なんなんだ」

「かけてきてるのに出ない」

「無言電話か」

桐内まつみは電話を切った。

「昨日から２回目です」

「なんなんだ」

「昨日はわたしたちの部屋の代表電話からでした」

「社内の人間なんだ」

「ええ」

「昨日はなんだ」

「赤井さんと食事でした」

「あのブッ倒れていた後か」

「ええ」

「だから言ったじゃないか～オンナに狙われてる」

「わたしですか？」

「赤井」

「桐内がジャマなんだよ」

「どうすればいいですか？」
「しばらくは赤井と話をするな」
「わたし今日コンビニコーヒーだったんですけど～給湯室のインスタントコーヒー飲んだ後に眠くなるんです」
「なに～？」
「昨日もそうだったんです」
「３回あったんです」
「それでコンビニコーヒーにしたのか」
「ええ」
桐内まつみは、新たな悩みを抱えてしまったのだと思った。
タクシーで行くからと言ってあったのに、王内よしこが迎えに来ていた。
「ゴメン」
「平気です」
「ありがとうございます」
「昨日のメールで平気でした？」
「サンプルの１万とか返事がまだなんだけど」
「わかりました」
「デザイン進んだ？」
「見ていただこうと思って」
三山明が玄関で待っていた。
「桐内さんいらっしゃい」
「桐内さんの顔を見るのが楽しみです」
「外井さんもいらっしゃい」
「私はお供ですから」
「どうぞ～会議室へ」
「社長と私は出かけますのでよしこさんと相談してください」
「承知しました」
「早速ですけどいいですか？」
「かまいません」
案内されたのは、パッケージデザイン室と書かれてあった。
「わたししかいませんけど」

パソコンが立ち上がっていた。大きなプリンターが設置されていた。桐内まつみの部屋と同じ構成である。
外箱の設計もやっているのだろう。
これまではどうしていたのだろう。ここに入ったのははじめてである。どこかに頼んでいたのだろう。
イラストレーターが立ち上がっていた。
「色を出すのに苦労しました」
「モンサンミッシェルの品です」
「完成しているんですか？」
「５月27日作としては完成してます」
「印刷してもらえますか？」
「わかりました」
「よしこさん寝てないでしょ？」
「わたしの最初の仕事ですから」
桐内まつみは、ルーペを出して表示されている字のチェックもはじめた。
「色はいいとは思うんだけど～わたしの一存ではいかなくなってるから」
「どうするんですか？」
「チェックして投げようと思う」
「大丈夫ですか？」
「修正あったら言うから」
「わかりました」
外井三郎は、食堂に向かった。社員食堂だ。自販機が設置してある。
「修正あるから」
「赤ペンでお願いします」
「うん」
「アガテの字は大き過ぎないですか？」
「遠くから見えるからいい」
「みんなに投げないといけないから」
「急いでるんですか？」
「ウルサイのがいるの」
「どこのクライアントもウルサイって三山さんが言ってました」

「そうね」
まだ11時なのに、メモリースティックに移して印刷して持ち帰った。
「よしこさんいいですよね」
「熱心だ」
「右だの左だの言われるんだけど耐えられるかな～」
「わからない」
また中野駅で牛丼をテイクアウトした。
「コンビニコーヒーテイクアウトしないでいいのか」
「スティックコーヒー買いました」
桐内まつみは、よしこのデザインをみんなに送りたいのだ。
「ただいま～」
「おかえり～」
机に赤いポストイットが貼ってあった。
「誰か来ました？」
「誰も来ません」
桐内まつみは、とにかくメールしないといけなかった。
「パッケージデザインの初稿です」
「個包装と６個入り紙箱と外箱です」
「表示もチェックしたつもりです」
「ご意見をいただけるようお願いいたします」
「北条食品の皆様にもチェックしていただけるようお手配をいただきたいと存じます」
「よろしくお願いいたします」
アガテチームの５名とＣＣで外井三郎に送った。
転送で、王内紙業の３名に送った。
電子レンジで牛丼を温めようとして給湯室に行った。
インスタントコーヒーがなかった。
桐内まつみは、コーヒーカップにお湯を注いだ。
桐内まつみの頭がグルグル回った。
ひょっとすると、桐内まつみが給湯室に来る時間を正確に読まれていたのではないかと思った。

○先里東方

16時だった。

「山際聡子さんからこのパッケージデザインは誰のものか聞かれました」

「紙業会社のパッケージ担当だと答えてあります」

「いい考えがあったら教えてください」

玉野久三からだった。

「王内紙業の社長の娘さんで今年デザイン学校を卒業してお父さんの会社のパッケージのデザインをしている王内よしこさんの作です」

桐内まつみは５名のアガテチームと外井三郎に送った。

次第に追い込まれていくのではないかと不安になった。

なにかがおかしい。

17時30分になって、桐内まつみは給湯室に向かった。

インスタントコーヒーが置いてあった。14時頃牛丼を温めにきたときには、インスタントコーヒーはなかった。

桐内まつみは、コーヒーカップにお湯だけ注いで机に返った。

桐内まつみは急に不安感に襲われた。山際聡子のわけのわからない態度もある。今のところ、アガテチームの全員が自分を守ってくれているのだが、それとて、いつまで守れるかである。

どうしてこうなるのかゼンゼンわからない。

桐内まつみは、思い切って歩いてアパートに帰ることにした。

心配だった。後を何度も振り返った。

だれかつけていると思うのだ。

コンビニにやってきた。

入ってグルッと回ってそのまま出てきた。

通りの反対側で桐内を見ているオンナがいた。帽子のオンナだ。反対側に歩き始めた。桐内まつみも反対側に歩き始めた。

もしかしたら、桐内まつみがコンビニで眠ってしまわないので、おかしいと思っているのかもしれない。グルッと回って出てくるのではなくて、しばらく椅子に座っていればよかったと思った。写真を撮りたいだろうから、出会ったかもしれない。社内のオンナだ。桐内まつみが見たらわかる。

写真が挟まっていた。鍵を開けようとして気がついた。
前回のコンビニの写真である。伏せて眠っている。
今日は残念だった。もっと気が利けばきっと会えていたのだ。
桐内まつみは、先里東方を検索した。
もちろん会ったことはないのだが気になっていた。
こころが何かわからない時に、検索で『こころの色』が出てきた。先里東方だった。ダウンロードして読んでみた。４００円だった。
こころは愛の器だと書いてあった。こころは、よろいと愛でシェアーされていて、フツウの人は、よろいが80に愛が20だと言っている。フツウの人は意外と愛が少ないのだと思った。
あかちゃんのこころは愛が１００と書いてあった。愛が80によろいが20の人は、人間の歴史上、ブッダと他の２人しかいないらしい。
読みっぱなしでそれ以上追いかけていない。そもそもよろいがわからないままだ。
ただ、今の桐内まつみに何か言ってくれるのではないかと淡い期待をした。
不安でいっぱいなのだ。
電子書籍である。
本の紹介の部分にアドレスが書いてあった。
フツウはこんなことはしない。ケータイの番号も書いてあった。
「わたしは現在いくつかの攻撃を受けていて、日に日に不安が大きくなっています」
「会社の給湯室のインスタントコーヒーを使って、帰宅途中で眠ってしまったことが２度あって、他の１度は帰宅前だったので机に伏せて眠りました」
「他にも、仕事で、理不尽な仕打ちを受けていて、不安がいっぱいです」
「今日も帰宅して鍵を開けたときに、わたしが帰宅途中で眠ってしまって、コンビニの机で伏している写真が、落ちてきました」
「誰かがドアに挟んだと思います」
「誰かにいつもつけられている気がします」
「返事をいただかなくてもかまいません」
「こんなおかしなメールをさせていただくことだけでも、わたしのこころは落ち着きます」

「先里東方さんの『こころの色』は読ませていただきました」
ごはんを炊いた。チンするカレーを買ってある。
まだごはんが炊き上がらない時間に、メールがきた。
「先里東方です」
「『こころの色』を読んでいただいてありがとうございます」
「まだ若そうな女性だと察しました」
「美人で仕事も急に上達して、あなた自身も自信が出てきたところかもしれません」
「その自信がよろいになっているのだったら、誰かのよろいが、あなたのよろいを傷つけたくなる衝動を招いてしまうかもしれません」
「状況は、実態として危険なところまで進んでいるので、身を守らないといけないと思います」
「給湯室のインスタントコーヒーに気がついたことはよいことだと思います」
「１に身を守ることで２には自分のよろいをよく見てください」
まさか先里東方から返事が来るとは思わなかった。
「返事をいただいて驚いています」
「わたしはデザイナーで昨年デザイン学校を卒業して、主として、商品のパッケージなどのデザインの仕事をしております」
「会社は中野にあって、デザイナー集団です」
「社員は46名います」
「何がなにやらわからないままですが、身を守りますしよろいがわかるようになろうと思います」
桐内まつみは、先里東方の本棚を検索した。
よろいの本がたくさんある。小説らしい。『よろいってなんだ』をダウンロードした。
「もしもし」
公衆電話からだった。無言電話だろう。
給湯室のインスタントコーヒーにレッドカードに無言電話である。
何をしたいのだろう。
外井三郎の言うように、赤井雄介とのことだったら、しばらく一緒にごはん

を食べないようにはできる。

○マカノクリエイト展示会

５月29日だった。
「おはようございます」
今日も机には赤いポストイットが貼ってあった。
レッドカードだ。
「桐内さんおはようございます」
赤井雄介の優しい声がウルサク思える。
「わたしに優しくしないで」と言ってしまいそうだ。
その度に、桐内まつみへの攻撃が激しくなる気がしてきた。
給湯室に向かった。
インスタントコーヒーが置いてあった。
桐内まつみは。コーヒーカップにお湯だけ注いできた。
身を守らないといけない。歩いていて自動車にぶつかっても、インスタントコーヒーのことは誰も気がつかない。
「10時から20分全員ミーティングがあります」
「会議室に集まってください」
誰もなにがあるのかわからない。
社長の野中俊二の話だろうと思った。
野中俊二はデザイナーである。１人でマカノクリエイトをはじめた。現在は46人も社員がいる。ほぼすべてのことを自分が決めている。
「９月６日と７日にマカノクリエイトとして単独の展示会を行うことにしました」
「場所は東京駅近くの展示場です」
「お客さんをお呼びしてマカノクリエイトのこれからの時代の提案をご覧になっていただきたいと思います」
「ブースを服飾とグラフィックとインダストリアルと特別コーナーの４つに分けます」
「全体のメインテーマはアースです」

「46人全員に自分のデザインブースとメインテーマの両方の提案権があります」
「メインテーマの採用者は１人で１００万円です」
「もちろんメインテーマのディレクターでもあります」
「年齢男女を問いません」
「各デザインブースのテーマを任せられた場合は30万円とディレクターです」
「７月14日と15日に全員集まってください」
「集中して全員で審査します」
「最終的には私が決めます」
「詳しいことは今からみんなのパソコンに送ります」
「それから、現在進行中の仕事に影響を及ぼさないようにお願いします」
桐内まつみは、まだ漠然と聞いていた。まだ自分の役割ではない気がしたからだ。
マカノクリエイトの儲け頭は服飾である。多くのブランドの事実上のデザインを請けている。
今日は少し時間がある。
アガテのデザインのことで返事が返ってきたら忙しい。マカノクリエイトの展示会のことを考えてみようと思った。
パソコンに、２０１４マカノクリエイト展示会が送られてきていた。
メインテーマが地球である。
なんとも大きなテーマで、考えようがないと思った。デザインブースのテーマも、メインテーマの地球に影響を受けることは確かである。
桐内まつみも、メインブースの提案はしないにしても、デザインブースの提案はしないわけにはいかない。
少し閃いたことがあった。
「明日休もうと思うんだけど」
「ボール投げてるから返事待ちだし」
「なにかありますか？」
「イヤなこと多いから山に行ってくる」
「いつまで？」

「明日１日」
「何かあったらなんとかしておく」
「よろしくお願いします」
外井三郎も明日は大丈夫だと思ったのだろう。
桐内まつみは、総務に行って、最新の解像度の優れた小さなビデオカメラを借りてきた。山に持って行くのだが、ぶつけて壊したら弁償しようと思った。
天気予報を見た。快晴である。しかし梅雨近くで雨が多い。
「桐内さんどうしますか？」
「お弁当買ってきました」
「わかりました」
「今晩時間あります？」
「わたし明日お休みいただいたので」
「わかりました」
桐内まつみは、赤井雄介がキライではない。一緒にいると楽しいことが多い。しかし、しばらくまずい。
桐内まつみは、いつもの時間に給湯室に向かった。
先輩がたくさんいるので12時15分くらいにしている。
インスタントコーヒーがあった。
桐内まつみは、コーヒーカップにお湯だけ注いで机に帰った。
今日は、王内よしこからも連絡がない。材料の手配なども忙しいのだろう。他の商品のパッケージデザインをしているかもしれない。
海老名一郎からも連絡がない。もともと海老名一郎からは連絡が少ない。
玉野久三からも連絡がない。
桐内まつみは買ってきていたおにぎりセットを食べた。
17時30分までずっとマカノクリエイト展示会のことを考えていた。
17時30分に給湯室に行った。
インスタントコーヒーが置いてあった。
桐内まつみは、お湯も入れないで席に戻った。
そして、５分後に給湯室に向かった。
インスタントコーヒーがなかった。

ピンポイントで、桐内まつみだけにインスタントコーヒーを置いているのだと思った。
「お先に失礼します」
「どうぞ」
桐内まつみは、今日は、誰がやっているのか知ろうと思った。
いつものようにコンビニに入った。そしてイスに座って、ヨーグルトを食べはじめた。
きっと知っているオンナが入ってくるはずである。
５分待っても誰も来なかった。アイスを食べた。
15分経った。
何かあったに違いない。
桐内まつみは、立ち上がってコンビニを出た。
いつもいる通りの向こうの帽子のオンナはいなかった。
桐内まつみは、ごはんが炊けるまで明日の用意をした。山に行くことは手馴れている。ザックに何から何まで入っている。着替えと食料だけを用意すればよい。
食料は明日の朝コンビニで買うことにした。
親子丼をつくった。すぐにできる。
桐内まつみは『よろいってなんだ』を読んだ。
自分のよろいをよく見ろと言われたのだが、まだよろいがわからない。
５月30日だった。
６時30分に起きてパンとコーヒーのいつもの朝ごはんを食べた。
７時にアパートを出た。オートバイである。
桐内まつみは１２０ＣＣのオートバイに乗っている。ちょっとした旅行はすべてバイクである。縦走しない山はバイクで出かける。
今日の棒の折れ山はバイクである。今日中に帰らないといけない。
青梅の街中のコンビニで、おにぎりセットと水とチョコとカップラーメンを買った。そして紅茶のティーバックを買った。明日から、会社では紅茶にするつもりである。
８時30分だった。
桐内まつみはビデオを胸にセットした。自分の足元と少し先が見えるように

固定した。

歩き始めた。

快晴である。

１００メートル歩いて映像を見てみた。

イメージ通りだった。自分の息遣いが聞こえてくる。

沢に入った。

水が多い。梅雨である。

水の中には入らないが、沢登になる。岩を登ることになる。小さいがいくつもの滝を登ることになる。傾斜が厳しい。鎖場もある。

桐内まつみの息遣いも荒い。

沢を越えるのに１時間以上かかった。

頂上は11時だった。

桐内まつみは、すぐにビデオを再生してみた。

小さいが滝を何度も越えている。臨場感がすごい。桐内まつみの息遣いと足元である。そして水がキレイである。

お湯を沸かした。

カップラーメンが食べたくなった。

水をかなり飲んだ。カップラーメンと紅茶でなくなってしまう。

帰りは、仕方がないから沢の水を飲むことにする。

カップラーメンもおいしかったしおにぎりもおいしかった。紅茶もおいしい。

頂上から見える西武ドームや新宿の高層ビルを見ていると、レッドカードや無言電話で不安になってしまう自分が情けなくなる。

下りの映像はどうなるのか気になった。

下りの方がタイヘンな道である。傾斜が厳しい。膝にくる。

沢に入った。下りは下りで、簡単には降りられない。濡れているので足元が滑る。慎重に下った。

14時にバイクに帰ってきた。ものすごい暑さで汗でグッショリだった。

ビデオも確認しないまま、バイクでさわらびの湯まで急いだ。温泉である。

このままではまずい。すべて汗である。

温めのお湯に浸かっていると眠くなってしまう。

レッドカードにこころを傷めている自分が情けなくなる。
着替えをしてさっぱりして下りのビデオを見た。
下りの方が落差がはっきりする。滝を下っている感じがよく出ている。危ないと思わず叫んでしまう。
「今日棒の折れ山に登ってきました」
「沢登でタイヘンでした」
「頂上から西武ドームや新宿のビル群を見ていると、レッドカードなどでビクビクしている自分が情けなくなりました」
「下でさわらびの湯に入りゆっくりしてきました」
「温泉です」
「先里東方さんに泣き言を言ったのですが今日は元気になりました」
桐内まつみは、冷やし中華をつくった。
「アナと雪の女王のありのままの自分がよろいのない自分という意味です」
「よろいはありのままの自分を隠すものです」
「時々は何も考えずに今日のような１日を過ごすことが大切です」
５月31日だった。土曜日だ。
桐内まつみは歩いて中野の会社に出かけることにした。昨日までのように、歩く道の誰かが気になることもなかった。急いでいるのだ。
「おはよう」
赤木雄介はいなかった。今日は休んでいるのだろう。
桐内まつみは、映像の編集室に向かった。
幸いなことに空いていた。土曜日だからだろう。
カッコよく見せたいという欲望は止めにしようと思っていた。それがコンセプトだ。
地球の小さな部分なのだが、地球は息づいている。
それも地球は水でできていることがわかりやすい。しかも、桐内まつみの息遣いがリズムになっている。
編集する前から、桐内まつみにはイメージがあった。確固たるものだ。そのために棒の折れ山に登った。
沢を登っているし下っている。滝がいくつも出てくる。生きているのだ。
12時になった。もうこれでいいと思った。ナレーションなどは必要ない。

20分にまとめた。頂上の眺めが絶好なのだが、今回のテーマにはそぐわない。カットした。
桐内まつみは、多分、この20分の映像は、メインテーマの地球に向いていると思った。メインテーマには出品するつもりはなかったのだが、映像を撮影した時点でメインテーマに向いていると思った。
一応、20分の映像を編集した。
自分のグラフィックデザインのテーマを探さないといけない。
こういうことは、じっくり考えても出ない時は出ない。
桐内まつみは、急いで映像の編集室に向かった。
桐内まつみが休憩中の映像を探した。
滝の下の水場である。音だけが聞こえる。顔を洗った。冷たい水だった。
１分30秒ある。これを繋いでスクロールにした。
完璧だと思った。
自分のグラフィックデザインの提案ブースのバックグラウンドにしようと思った。デカイモニターが必要である。自分のブースである。部屋にあるモニターを使用することしかできないと思った。
さて、それで何を表現するかである。
「涼」だろう。それも水による「涼」だ。
ビール缶のデザインをした。山の水のデザインをした。冷やむぎの箱もデザインした。ソーメンもデザインした。かき氷屋さんのポスターをデザインした。
沢を登っている時に、滝が頭上から落ちてくるかのような一瞬を切り取った写真である。様々な写真である。編集室でコピーした。
水ようかんをデザインした。水辺のカレンな小さな花も印象に残っているが映像がない。花ではなくて水しか追っていなかった。
14時になっていた。机からカップラーメンを取り出してコーヒーカップも持って給湯室に向かった。
インスタントコーヒーはなかった。
14時になっていた。
この時間ではインスタントコーヒーは置いていない。桐内まつみが給湯室にやってくる時間ではないのだ。

15時だった。
「明日パッケージの試作が出来上がりますが、いらっしゃっていただけないでしょうか」
「もし都合が合わなければ６月２日月曜日はいかがでしょうか」
王内よしこからケータイメールだった。
「６月１日に伺います」
すぐに返事をした。
「玉野久三から全員にメールがきた」
「７月22日のマイフレッシュの展示会用と営業サンプル用に１万個のアガテのサンプルをつくることにしました」

○レッドカード２枚

17時30分になった。コーヒーカップを持って給湯室に入った。
インスタントコーヒーが置いてあった。
誰かが間違えて飲んだらどうするのだろう。
桐内まつみは、廊下の端まで行って壁にもたれてコーヒーを飲んだ。
誰がインスタントコーヒーを持って出るのか見たいのだ。
５分経過した。２人入ったが、何も持っていなかった。
10分経過した。
その後３人入ったがインスタントコーヒーのようなものは持っていなかった。
桐内まつみは、もう１度給湯室に入った。
インスタントコーヒーはなかった。給湯室のどこかに隠して置いてあるのだろう。
桐内まつみは、棚を開けて調べ始めた。
スーパーの買い物袋があった。中にインスタントコーヒーがあった。桐内まつみは、それをすべて水で流して、空のインスタントコーヒーとスーパーの買い物袋を元の棚にしまった。
そして何事もなかったかのように給湯室を出た。
結局、誰がインスタントコーヒーに睡眠導入剤を入れているのか、それを、

桐内まつみだけが飲むように仕向けているのは誰なのか、つかめなかった。
今日は土曜日である。多くの女子が出勤していない。しかし、聞いて回るわけにもいないし、顔を見て回るわけにはいかない。46人中24人が女子である。今日は何人出勤しているのだろう。わからない。
今日も歩いて帰ることにした。
なんともない元気だ。
なにかいいアイデアはないだろうか。
６月１日だった。
「おはよう」
赤井雄介は日曜日だから休みだろう。
机の真ん中に赤いポストイットが２枚貼ってあった。
レッドカードで退場の意味だろう。昨日のインスタントコーヒーを流したことだろう。
警察だったら、監視カメラを設置するのだろうが、桐内まつみには、どうしたらいいのかわらない。次第にエスカレートしそうで怖い。
「桐内さんですか？」
「ちょっと用事あって行けないからお願いします」
外井三郎から電話だった。
９時20分に給湯室に行った。
インスタントコーヒーはなかった。
棚を開けてレジ袋を探したがなかった。
レッドカードが２枚になった。
桐内まつみは、そのまま中野駅に向かった。八王子の王内紙業に向かう。
「もしもし」
無言電話だと思った。公衆電話からである。
桐内まつみは、電車の中でもタブレットで『よろいってなんだ』を読んでいる。
去年出た大学でデザインコンペで常に１番だった。ミスコンにも出て選ばれた。なにをやっても１番だと思っている。それがよろいだといっている気がする。先里東方が言っている気がする。
しかし、もう小さきころからお父さんにもお母さんにも同じことを言われて

育った。
絵が上手だった。子ども展覧会には常に出た。そして金賞だった。１回外れたことがあったが、母親は、審査員に不満をぶつけた。
これらがゼンブよろいだったら、こころは愛とよろいがシェアーしていると言っているから、桐内まつみの愛は小さいことになる。
こんなバカなことはない。
愛が小さくなるからよろいを脱げといっている。せかっく１番になっているのにどうして２番になるのかわからない。それもわざわざである。
先里東方の言っていることが理解できない。こころは愛の器だと書いてあってグッドだと思ったのに。
「こんにちわ～」
王内紙業は日曜でも動いていた。
「中小企業だから休んでいられないんです」
「お父さんは？」
「お年寄りは休みです」
「今日おいしい鳥料理のお店があるんだけど行きません？」
「接待です」
「お父さんいなくて大丈夫？」
「そうしろって電話あったから」
「工場でカットしてきますから待っててください」
王内よしこは、工場棟に向かった。
最近の桐内まつみは、近くのオンナにことごとく狙われている気がしている。しかし、王内よしことは良い関係になっている。王内よしこがコーヒーに睡眠導入剤を添加することなど考えられない。
これは一体なんだろうと考えてしまう。
山際聡子がわからない。
「わたしはダイエットの奥に潜むウオンツのことを考えて、この３つの案にしました」
桐内まつみは、このどこがおかしいのかわからないのだ。
「あんたはデザインだけをやっていればいいの」
いかにもこう言い放っている。

明らかに、嫌われたのだ。
これは一体なんだろう。
自分もそういうことを言うのだろうか。王内よしこに、言うのだろうか。
言わない。やはり、自分が１番センスがあると思っているからだ。
「組み立てますから待ってください」
「何枚あるの？」
「10枚です」
「持って帰っていいの？」
「組み立ててお持ちください」
王内よしこは、個包装に四角い木を詰め込んで、６個入りの箱に収めた。
「わたしもやるわ」
10箱並べて陳列のようにしてみると、けっこう迫力も出てくる。
「どう陳列するんでしょうね」
「いくつ重ねるかだね」
「５箱は重ねるんでしょうね」
「なにか～まずいとこありますか？」
「ううん～これでいい」
「わからずやがいるからね～わかんないけど」
「桐内さんはこれでいいんですか？」
「わたしはいい」
「それだったらいいです」
けっこう時間がかかってしまった。11時30分だった。
「桐内さん鳥料理食べに行きましょう」
「わかった」
桐内まつみは、中野に帰ってすぐに、写真を撮った。10箱しかないので外井三郎のために１箱残すことを諦めた。何枚も写真を撮った。
机のレッドカードは２枚だった。
「アガテのパッケージ試作が上がりました」
「海老名一郎さんのところへ持っていこうと思いますが」
「写真を撮りましたので添付します」
日曜なので玉野久三はいないと思ったのだ。

「玉野久三さんのところへ持っていけ」
「玉野久三さま」
「山際聡子さんのところへ持って行ってください」
「修正があるかもしれませんが、できるだけ修正がないように収めてください」
「みんなの総意だと言ってください」
桐内まつみは、大きな手提げ袋のままを、玉野久三のところへ持って行った。
「予定どおり仕上げていただいて助かります」
「早速山際聡子さんのところへ行ってきます」
「なにか付け足すことはありませんか？」
「アガテのサンプルの１万個のパッケージですが、７月15日に足利工場に納品させていただける予定です」
「理解しました」
「山際聡子さんが心配なんだ」
「よろしくお願いいたします」
「承知しました」
桐内まつみは、中野へ帰った。予定通り進んでいる。内容もグッドだ。なによりも商品名をアガテにして締まってきた。
中野に帰ってきたとき、赤いポストイットが３枚貼られていた。
レッドカードが３枚である。
日曜なのに、だれかがやっている。
今日は少し遅くまでいようと思った。玉野久三さんが山際聡子のところへパッケージを届けているのだ。何かあったら困る。修正だったら至急にやらないと間に合わなくなる。
桐内まつみは、少しおかしいと思った。
さっきアガテのメンバー全員に送ったメールがないのだ。
大事な写真が添付してある。
赤井雄介にメールした３通か４通のメールもない。デイトの誘いなどではない。同期会の案内だったりだ。
赤井雄介からのメールは、まずいのがあった。火曜の夜の食事の誘いだっ

た。
これも消えている。
桐内まつみは、メールの内容をすべてメモリースティックに移して、メールを空にした。
これからすべてこうしようと思った。
パソコンのロックキーを変更した。机の中にロックキーをメモしておいたのがいけなかった。
桐内まつみは、スマホのメモ帳に、ロックキーの暗号を記録させた。これは覚えられない。
タイヘンなことになった。ホントにレッドカード３枚である。
メールをコピーされたとしても、おかしなことはない。不正なこともやっていなし。恋人もいない。赤井雄介からの食事の誘いは、返事をしないままになっていた。
先里東方の、自分を守れになってきている。
桐内まつみは、よく考えてみた。中野の会社に犯人がいるのだが、会社では、他者に見つからないように証拠を残さずにやるだろう。桐内まつみだけにピンポイントで嫌がらせを行う。
睡眠導入剤などは、桐内まつみが自動車に跳ねられても誰もわからない。悪質なのだ。
今日は桐内まつみのパソコンに侵入している。
予測しないといけないのだが、社長に話さないと難しいかもしれないと思う。
アパートもタイヘンである。侵入されてはいないのだが、ドアに写真が挟まっている。これ以外に何もないのだろうか。無言電話があるのだが、今のところ桐内まつみを悩ませるだけだ。
桐内なつみは、中野駅の電気屋さんに走った。大容量メモリースティックを買った。
桐内まつみは、走った。誰も見なかったはずである。
このままでは、パソコンを壊されるかもしれない。バックアップをしないといけない。
棒の折れ山の沢登りの映像がなくなったら泣いてしまうだろう。甘かったの

だと思った。
桐内まつみのパソコンはデザインが多いので大きなディスクが入っている。
２本買ってきてよかったと思った。
財布の中に入る。肌身離さす持つことにした。
他にやることはないか考えていた。
「山際聡子さんから次の指摘がありました」
「アガテの文字の縁取り緑になっていますが白にしてください」
「紙質を少し厚くできないか」
玉野久三からメールがあった。
桐内まつみは、王内よしこにメールした。
「紙質の件はつぶれが気になるのでしょうがテストした映像がありますので送ります」
「このままで平気だと考えています」
「アガテの縁色の件白にして明日送ります」
「わからずやの方ですか？」
20時になって、桐内まつみは中野の会社を出た。中野駅には行かずにアパートまで歩いて帰ることにした。あとをつけられている感じはしない。いつものコンビニに寄ってサラダとビールとパスタを買った。
桐内まつみは睡眠導入剤を飲んでいないので、あとをつける意味もない。誰もいないのだろう。
鍵を開ける時に写真が挟まっていることもない。
「今日は、無言電話と会社のパソコンへの侵入がありました」
「机の中にパスワードを入れておいたのが失敗でした」
「わたしの何かを調べています」
「睡眠導入剤が入っていたと思われるインスタントコーヒーを見つけて流しました」
「わたしの机のレッドカードは３枚になりました」
「誰かわかりませんが、エスカレートしています」
「パソコンは、大容量のメモリースティックを買ってきて保存しました」
「毎日保存してバックに入れておくことにしました」
「先里東方さんの言われるように、わたしの身を守っています」

「わたしはよろいのことがまだよくわかっていません」
「わたしのよろいは厚いのでしょうか」
「それはよくないことなのでしょうか」
あんまり長いメールにすると、先里東方に読んでもらえないのではないかと思った。
パスタをチンして食べていた。サラダを食べていた。
アッという間に返事がきた。
「桐内さんが睡眠導入剤を発見したことで、犯人は、更なる桐内やっつけ案を考えると思います」
「同じ会社なので、他者に見つからない工夫をすると考えられます」
「男ですか？理由は」
「よろいはすべて桐内さんの特徴です」
「多分美人でしょう」
「美人も特徴です」
「デザイン力もすごいのでしょうがそれも特徴です」
「多分学校で１番だったでしょう」
「単なる特徴なのに競争することが私にはわかりません」
「人はやはり人間的な魅力が大事です」
先里東方は、桐内まつみのことを良く思ってくれてない感じである。お父さんもお母さんも、大学の教授だった安岡保もマカノクリエイト社長の野中俊二も、桐内まつみを絶賛した。
先里東方は、ちょっと違うようだ。
「赤井雄介という同期の男性が社内でモテています」
「インダストリアルデザインをやっていて優秀です」
「桐内まつみに喰われるといううわさがあるのだそうです」
「わたしは同期ですし一緒にごはんを食べますがそれだけの関係です」
またアッという間に返事が来た。
「赤井さんを調べれば何かわかるかもしれません」
「くれぐれも自分を守ることが大事です」
確かに、守ってばかりいても解決しない。赤井雄介を調べるのはどうすればいいのだろう。

○レッドカード３枚
６月２日だった。
「おはよう～」
「おはようございます」
「明日の返事がないんですけど」
「ああ～ゴメン～仕事で八王子行かないといけない」
「夜ですよ？」
「ワルイ」
「都合のいい日があったら教えてください」
こういうのが１番まずい。
「わかった」
９時20分に、給湯室に行った。コーヒーカップにお湯を注ぐためだ。インスタントコーヒーはなかった。
「桐内まつみさま」
「アガテの白い縁取り送ります」
「よろしくお願いします」
王内よしこのメールをそのまま海老名一郎と玉野久三に送った。
「山際聡子さんのご意見をお聞かせください」
「紙質の実験結果を送ります」
「よろしくお願いいたします」
桐内まつみは、12時15分に給湯室に向かった。今朝パンを買ってきた。
インスタントコーヒーはなかった。
棒の折れ山以来、紅茶に変えた。ずっとコーヒーだったのだが、紅茶もおいしい。
15時だった。
「山際聡子が説明してくれと言っている」
「今日だけど」
桐内まつみは王内よしこに電話をした。
「わからずやの山際聡子さんから説明してくれないかだけど」
「桐内さんが説明するんでしょ？」

「わたし呼び出していたぶる」
「いたぶるってなんですか？」
「いじめだからワルイ方向に行く」
「どうしてですか？」
「わからない」
「桐内さんに説明に来いなんでしょ？」
「紙の厚さの実験はよしこさんじゃないと説明できない」
「わたしが行くんですか？」
「わたしは逃げたくないんだけどみんなは反対する」
「怒らせるからですか？」
「わたしはワルクないけどまずくなると思ってる」
「何時に行けばいいですか？」
「２時間で恵比寿に行ける？」
「わかりました」
「じゃ～17時15分に恵比寿の駅で待ってる」
「電話して」
「わかりました」
16時30分になって桐内まつみは、外井三郎と一緒に出た。
「桐内さんは行かない方がいい」
「わかってる」
「多分、桐内さんの顔を見たら、無理難題になります」
「わたしもそんな気がしてるから」
「彼女はどうかしてる」
桐内まつみは返事をすることができなかった。クライアントなのだ。大きな会社である。
「今日の朝桐内さんの机にポストイットが貼ってあったけどあれはサインですか？」
「わたしが行った時はなかったですけど」
「赤井君に渡しました」
「どうしてですか？」
「赤いカードが３枚あったらおかしい」

「赤井くん何も言いませんでした」
「たいしたことじゃないと思ってるんじゃないですか？」
「なんですか？赤いポストイット」
「わかりません」
「桐内さんはマカノクリエイトの展示会のコンペに出品するんですか？」
「そのつもりです」
桐内まつみは、昨日パソコンに侵入されたことが気になった。パクられたかもしれない。
「応募っていつからでしたっけ」
「６月15日から」
桐内まつみは、今日帰って考えようと思った。先に応募しないといけない。
「わたしたちここで待ってるから」
「わかりました」
桐内まつみと外井三郎は、北条食品の近くのカフェに入った。
「心配だな～」
「桐内さんが出た方がもっと心配ですよ」
「あの人なんでしょうね」
「桐内さんを徹底して潰そうとしてるって言ってます」
「誰が？
「久野豊とか」
「どうしてわたしを徹底して潰すんですか？」
「北条食品の仕事がうまくいけばいいんでしょ？」
「オレたちはそう思うけどあの方は違うらしい」
「桐内まつみを潰すことの方が優先する」
「バッカじゃないの～」
「大きな声を出さないでください」
「ここは北条食品の近くですから」
18時30分になって電話があった。
「中野に行きますから」
「山際さんが途中まで一緒に帰ると言うので」
「どこ？」

「新宿まで一緒です」
「どうだったの？」
「後で」
桐内まつみと外井三郎は、急いで恵比寿駅に向かった。
19時に桐内まつみが中野に帰った時、３枚の赤いポストイットが机に貼ってあった。
赤井雄介は帰ったのだろう。いなかった。
「ここには入れないから応接コーナーにいよう」
外井三郎が入ってきた。
「電話してみようか」
「メールの方がいい」
「王内よしこさま」
「応接コーナーで待ってるから」
返事がないまま、桐内まつみと外井三郎は、応接コーナーで待った。
どうなったか心配なのだ。新たな無理難題をぶつけられた可能性もある。
「冷たいもの買ってくる」
「ええ」
「もしもし」
また無言電話がきた。
公衆電話だった。
無言電話は誰なのだろう。
「すみません～連絡できなくて」
王内よしこが息を切らせて応接コーナーに入ってきた。
「おつかれさま」
「外井さんは？」
「冷たいもの買いに行った」
「アガテの縁の白も紙質も了解していただきました」
「ホント？」
「ええ」
「外井さんが来るから同じこと説明してて」
桐内まつみは、アガテチームに連絡しないといけない。

桐内まつみが机に戻った時、カップが倒れていた。紅茶が流れ出していた。誰かが廊下を走って逃げたような気がした。メールのことで頭がいっぱいだった。
一瞬で桐内まつみの顔は真っ青になった。バックを応接コーナーに置いてきた。
タオルが必要である。
「どうぞ」
赤井雄介がタオルを差し出していた。
「ありがとう」
「見てたの？」
「今３Ｄプリンターの部屋から来たばかり」
「どうだと思う？」
「起こしてみないとわからない」
桐内まつみは丁寧にパソコンを拭いたマウスも拭いた。
「大丈夫かな～」
「わからない」
「もしもし」
「どうしました？」
「外井さんのパソコン貸して」
「わたしのパソコン紅茶でビショビショ」
「じゃ～オレの机に行って」
「聞いた？」
「聞いたからすぐ行きます」
桐内まつみは、外井三郎のパソコンから、アガテチーム全員に連絡をした。
多分、みんなホッとするはずである。
「よしこさんありがとう～助かった」
「なんでもありません」
「ながかったけどなにかあった？」
「桐内さんのことをずっと聞かれていました」
「なにを？」
「どんな人か」

「ミスコンの話しとかしたの？」
「ええ」
「それだけなの？」
「紙質の実験の話は真剣に聞いていただきました」
「外井さん何かあります？」
「いいです」
「じゃ~帰ろうか」
「ありがとう」
「外井さんお先に」
「このままですか？」
「パソコン乾いてほしいから」
桐内まつみは、中野まで一緒に帰ることにした。
「30分くらいごはん食べない？」
「山際さんにも誘われました」
「行かなかったんだ」
「桐内さんが待ってるから」
「ありがとう」
「わたしご馳走するわ」
桐内まつみは、１時30分まで、自分のパソコンに、マカノクリエイト展示会のデーターを移して、メインブースとデザインブースのアイデアを考えた。
もし、明日パソコンが生きていたら、続きを考えようと思った。
最新の状況をメモリースティックにコピーした。
６月３日だった。
「おはよう」
「おはよう」
レッドカードは３枚だった。
「それなんですか？」
「わかんない」
「パソコン生きてたらいいですね」
「うん」
桐内まつみは、パソコンを起こしてみた。

なかなか動き始めなかった。
「ダメそうですか？」
「わかんない」
桐内まつみは、周辺を片づけはじめた。キレイにしないといけない。
その時、聞きなれた音がしてパソコンが動き始めた。
助かったかもしれない。
紙袋を持ってきて、机の上のものをゼンブしまった。
机の真ん中の引き出しをゼンブ空けて、コーヒーカップと紅茶だけにした。
これでいいのだ。
机の上にあったものは自分でも何も覚えてはいない。
「すっきりしましたね～」
「うん」
アッという間だった。
「ああ～動いたのか」
外井三郎がやってきた。
「昨日のメール届いたのか」
「多分」
「これくらいキレイにしてれば紅茶こぼすこともないんだよ」
「こぼされた」と言いたいのだが、抑えた。
「王内よしこさんによろしくお伝えください」
「助かりました」
玉野久三も海老名一郎も同じことをメールしてきた。
ホントに助かったなのだ。
山際聡子は難敵なのだ。
「都合のいい日を言ってください」
12時になって、いきなり赤井雄介が言った。
今日の夜は八王子に行くことになっている。ウソである。
赤井雄介と今食事をすることはすごくまずい。
先里東方の言うように、赤井雄介を調べようと思っている。
17時になってすぐに、「おさきに～」と大きな声を出して桐内まつみは部屋を出た。

中野寄りのビルで夏のカーディガンを着た。サングラスをした。そして、ハンバーガーショップの２階の通りが見える席に座った。
コーヒーとシーフードを買って来たいのだが、バッグを置いていけない。
入り口からトレイを持ってきて席に置いた。
ずっと見ているのだが、赤井雄介は通らない。桐内まつみを誘ったのだが、断られて仕事をしているのかもしれない。
18時15分だった。
赤井雄介が中野駅に向かっている。桐内まつみは慌てて出ようとした。
「トレイをお願いします」
赤井雄介を逃してしまうかもしれないが、ゴミ箱に急いだ。
通りの向こう側を歩いているはずである。
小走りして追いつこうと思った。
少し下向きのまま赤井雄介は歩いている。
そのまま中野駅に入った。桐内まつみも駅に入った。赤井雄介がどこに住んでいるのかわからない。同期で仲が良いのだが、どこに住んでいるのか聞いたことがない。もしかしたら自宅に帰っているのかもしれない。
荻窪駅だった。
３分歩いたら少し静かな街になる。イタリアンカフェに入った。自宅に帰るのではなかったのか。
少し時間をおいて桐内まつみもイタリアンカフェに入った。赤井雄介は右奥にいた。入って来た桐内まつみを一瞬見たが待ち人が違うのだろう。視線をメニューに移した。
夏物カーデガンにサングラスに帽子では、桐内まつみに気がつかない。
左奥の席に入り口が見えるように座った。
ミニピザにコーヒーを頼んだ。
３組のカップルが入ってきた。赤井雄介は誰かを待っている風だ。
コーヒーを飲んでいる。
19時になった。
１人の女性が入ってきて、迷わず赤井雄介に向かった。
結城麻衣子に間違いはない。
赤井雄介と同じ工業デザインをやっていて桐内まつみと赤井雄介とは別の

チームである。２コ上である。
奥に座っていた赤井雄介が結城麻衣子に席を譲って自分は入り口に背を向けて座った。
桐内まつみはサングラスを下にずらしてオンナの顔を見た。結城麻衣子に間違いはない。
声が聞こえないから何を話しているのかわからない。
１分も話さないうちに赤井雄介と結城麻衣子は立ち上がって入り口に向かった。
桐内まつみは、慌ててミニピザをほうばってコーヒーを飲んで立ち上がった。
お金を用意しておけばよかった。８８０円だった。おつりがなくて奥の帳場に取りに行った。すごくまずいと思ったのだが、どうにもならない。
地下から階段を上がって通りに出た。どっちに行ったのかわからない。
街の奥に歩いてみた。急ぎ足だ。歩きは山で鍛えている。
もう暗くなってきてよく見えない。
２人がゆっくり歩いていた。マンションに入っていった。白線だけの歩行者通路から見ていた。
エントランスには入れそうだがエレベーターホールには入れそうもない。指紋認証のようだった。結城麻衣子が住んでいるようだった。
２人がエレベーターで上がって行くのを確認して、エントランスに入ってボックスを確認した。
５１２号室が結城麻衣子の部屋だった。
こういう関係だったのかと思った。うわさになったこともない。赤井雄介と桐内まつみの方がうわさになっている。
それにしても、赤井雄介は、どうして今日桐内まつみを誘ったのだろうか。
意味がわからない。空いている日を教えてくれと言った。
二股しようとしているのか。
もうこの場にいても意味はない。
問題なのは、結城麻衣子が、睡眠導入剤のオンナであるかどうかである。それはわからない。
「今赤井雄介というわたしとうわさになっている同期のオトコをつけまし

た」
「荻窪で結城麻衣子という２コ上の工業デザイナーが来ました」
「２人は近くのマンションに入っていきました」
「結城麻衣子のマンションでした」
「社内では赤井雄介が桐内まつみに喰われたといううわさがあるそうです」
「睡眠導入剤のオンナが結城麻衣子かどうかわかりませんが一歩進みました」
桐内まつみは、トマトを切ってキュウリを切って卵焼きをつくって、ドレッシングで食べ始めた。
「調べるだけです」
「自分の身を守るためです」
「ムリをしないように」
「赤井雄介は桐内まつみさんにはどうなのですか？」
「少しは自分のよろいに気がついているのですか？」
返事が早いのはなぜだろうか。
「赤井雄介は、今日わたしを誘っていました」
「わたしは、赤井雄介とごはんを食べていると、また睡眠導入剤のようなことがあると思っているので、断りました」
「誰かにウオッチされています」
「何がわたしのよろいなのかよくわかりません」
６月４日だった。
「八王子はどうでした？」
「仕事はうまくいった」
桐内まつみは、パソコンのパスワードをスマホのメモ帳を見ないとわからない。
「空いてる日教えてください」
「赤井くんとわたしうわさがあるらしいの」
「しばらくごはん行かないから」
「そんなの関係ないだろう」
桐内まつみはコーヒーカップを持って給湯室に行った。９時20分だ。
インスタントコーヒーはなかった。

赤井雄介がどうして桐内まつみにこだわるのかわからない。結城麻衣子がいるのに。
「高崎に行ってきます」
「お客さま？」
「18時ごろになると思います」
「わかった」
10時になった。
桐内まつみは赤井雄介のパソコンを探ってみようと思った。幸いなことに誰もいない。
パスワードがわからない。
引き出しを見た。
机の裏を見た。多分パスワードだ。いくらなんでも覚えられない。
メールを開いてメモリースティックにコピーした。
すぐに閉じた。
結城麻衣子と浜野きよみと桐内まつみと米田やすこの４人がいた。メールのオンナだ。この中に、睡眠導入剤のオンナがいるはずである。
一歩前進である。
桐内まつみは、外井三郎が持ってきた次の仕事に手をつけようと思った。
大阪にあるレトルトの会社のパッケージだ。
単独の受注である。
レトルトで１番売れるのはカレーらしい。
現在桐内まつみがオリジナルで持っているのは滝である。水である。カレーライスとフィットしない。夏カレーがいいのだが冷たいカレーはおいしくないだろう。
桐内まつみは、一瞬に閃いた。
棒の折れ山の沢を登っている時の光だ。編集する時に、カットした。
見てみた。
逆光になった時だ。ギラギラしてこれだとカレーでもおかしくはない。
急いで編集室に向かった。
17時まで使用中だった。17時から18時まで予約した。
12時20分になって、桐内まつみは、給湯室に向かった。紅茶を飲みたい。

インスタントコーヒーはなかった。カップラーメンにお湯を注いで、コーヒーカップにもお湯を注いだ。
久しぶりに中野のスーパーに寄った。沢登の滝の逆光は素晴らしい。もう１度行って今度は写真を撮ってこようと思っている。
刺身を買って帰りたい。
18時40分だ。サケが半値になっていた。タコも半値だった。
前を浜野きよみが１人で歩いていた。変装をしていない。顔を見たらフツウに話すしかない。あとをつけたいのだ。
先にスーパーマケットを出た。出入り口が１ヶ所しかない。
浜野きよみのメールは、よくわからない。ただの仕事の連絡だけのような気もする。それでも１人１人確かめるしかない。自分の身を守らないといけない。
浜野きよみは中野駅から各駅停車で新宿方面に乗った。東中野で降りた。乗り替えるのではないらしい。メガネがあることに気がついた。コンタクトが苦しいときにメガネをする時がある。夏物カーディガンもある。
見失わないように改札口を出た時、隣の改札口から桐内まつみを追い越すように赤井雄介が出てきた。
桐内まつみは。一瞬息をのんだ。
赤井雄介は急ぎ足で浜野きよみに追いついた。そう立派ではないアパートに入って行った。
浜野きよみが何を買っていたのか見ておけばよかった思った。
２階の端の部屋に灯りがついた。
赤井雄介は、結城麻衣子のマンションに一緒に入って行った。
桐内まつみは、アパートの郵便受けを見た。浜野きよみだった。
赤井雄介は、結城麻衣子と浜野きよみの両方の部屋を訪れている。
「おはよう」
「おはようございます」
６月５日だった。
昨日の赤木雄介の洋服を覚えておけばよかった。オトコは同じような服装なのでわからない。
「今日は空いていませんか？」

「うわさあるからしばらく一緒に食事には行きません」
「空いてる日を連絡ください」
桐内まつみは、赤井雄介との将来のことを考えたこともある。イケメンである。カッコいい。しかし、今の桐内まつみは、赤井雄介の顔も見たくないのだ。
レッドカードが消えていた。
レッドカードが３枚になっていたのに、今日はない。
「おはよう」
外井三郎がやってきた。
赤井雄介と打ち合わせのようだ。クライアントにデザインの了解をいただけなくて困っていた。
２人で３Ｄプリンターの部屋に入って行った。
桐内まつみは、大阪のレトルト会社のパッケージデザインをはじめた。
今日の朝コンビニで買ってきた野菜スープを取り出して飲んでみた。レトルトである。冷たいというか常温である。スープは、温かくしないとおいしくないと思っていたのだが、おいしい。
「次はサカイ食品でレトルトの会社だ」
「今度一緒に大阪に行くので考えておいてほしい」
「決まったのですか？」
「オリエンテーションがある」
「パッケージデザインだけのオリエンテーションだ」
「コンペがあるのですか？」
「多分」
「いつですか？」
「６月上旬だと思う」
外井三郎にそう言われている。
もう６月上旬である。
一緒に大阪に行くと言っていたが、経費の都合でオレだけ行って来るになるに違いない。パッケージデザインでは、そんなに大きな金額を見積できない。
「サカイ食品は１度も仕事ができないでいる」

「桐内で取ってみたいと思っている」
まだどうなるかわからない。
デザインの仕事は、こういう仕事が多い。
滝の水と逆光の光は、夏のレトルトスープに向いている。
今年の夏商品はもう終わっている。
９月６日７日のマカノクリエイトの展示会では、２０１５年夏商品のパッケージ提案をしようと思った。そのためには、社内の審査会をとおらないといけない。審査会といっても、ほぼ、社長の野中俊二１人が決めている。
「市場調査に出かけます」
黄色のポストイットに書いて机に貼っておいた。
アガテの仕事は、もう生産作業に入っている。
銀座に出ようと思った。
無言電話が入った。公衆電話である。
誰だろうか。
桐内まつみは銀座のデパートを回った。夏物レトルト商品を探すのに適切だった。意外と夏物レトルト商品は多い。カレーやパスタなどは季節に関係なさそうである。
桐内まつみは神田の山の店に寄った。
７日の土曜日にもう１度棒の折れ山の沢を登ろうと思っている。写真がほしい。
山専用の食料にもレトルトが多くなっている。なんとなくミートソースを買った。麺は少し短い。山でレトルトミートソースと一緒に茹でるからだ。
スパッツを買った。少し長目のスパッツだ。多分、滝に入って撮影する。
シューズもカバーする。
夏物レトルト商品のサンプルが重い。仕方なく中野に帰ることにした。
サンプルボックスも買った。机の上に乱雑に置いておくことは止めた。サンプルボックスは机の下に収納することにした。必要な時にだけ取り出せばよい。
またパソコンに紅茶をこぼされてはたまらない。
「ただいま～」
「おかえり～」

「レトルトやるんですか？」
「まだわかんないけど次の仕事」
「おいしそうですね」
サンプルボックスにレトルト商品を移して机の下にしまった。
レッドカードがなくなった。どういうことだか意味がわからない。
「今日空いていませんか？」
「赤井くんとうわさあるからしばらく一緒に食事しません」
桐内まつみは、赤井雄介の顔も見たくないのだ。せっかく誘っているのにといった態度も気に入らない。イケメンだしモテるオトコなのだが、裏の顔を桐内まつみは知っている。
６月６日になった。金曜日だ。梅雨前線がゆっくり北上していて、土曜日はもう危なさそうである。梅雨に入るかもしれないとテレビが言っている。
「外井さんすみません~急に用事できたので代休します」
「オレまだフトンだけど」
「赤井にも電話しておけ」
「わかりました」
「もしもし」
赤井雄介のケータイには繋がらなかった。
同じ部屋の米田やすこに電話をした。
米田やすこは３つ上のデザイナーである。桐内まつみと同じグラフィックのデザイナーである。チームは外井三郎のチームではない。
赤井雄介とメールをしている。
「米田さんですか？」
「朝早くからすみません」
「なんなの？」
「急用で代休したいんですけど赤井君に繋がらないから」
「ポストイットに代休って書いて貼っていただけませんか」
「それだけ？」
「お願いします」
「わかった」
米田やすこも赤井雄介と関係があるのだろうか。米田やすこだけがよくわか

らない。
桐内まつみはアッという間に準備ができる。今日はお昼も決まっている。昨日買った２リットルの水が重そうである。そんなことより太陽がほしい。多分、今日が最後かもしれない。しばらくは梅雨でグズグズの天気だろう。
桐内まつみはバイクを降りればそのまま山に登れるスタイルである。
今日は動画はいらない。写真がほしい。少し時間がかかるかもしれない。
沢まで少しの距離がある。順調である。
テレビは今朝は大阪が豪雨だと言っていた。次第に東京にやってくる。東京はまだ絶好である。素晴らしい写真が撮れそうだ。
最初の滝で陰影のある滝としぶきが撮れた。20枚撮った。絶好である。
ものすごい暑いのだがヤッケを着てバイクのヘルメットのまま歩いてきた。
水をかぶっているのだが、なんともない。
滝の度に何枚も写真を撮った。
大きな滝ではこんな写真は撮れない。
頂上では13時だった。
ガスにコッフェルで湯を沸かした。パスタを茹でてレトルトミートソースを一緒に温めた。
桐内まつみは、写真を１枚１枚見た。パスタが茹で上がるまで見ていた。
ビショビショなのだが、ヤッケを脱いでしまえばなんともない。
桐内まつみは、日帰りでは八ヶ岳に行く時しかコッフェルを持たない。休憩も50分に５分しかといらない。
すごい早い方だと思っている。
こんな風にデザインと山を組み合わせたのははじめてだ。山はストレス解消である。
ミートソースがおいしい。格別である。レトルトはおいしい。
しばらく頂上にいた。
麺を茹でたお湯で紅茶を飲んだ。
おいしかった。
桐内まつみは、下りの沢でも写真を撮った。３つ目の滝からは、上空に雲が現れて太陽がなくなった。
17時にアパートに帰ってきた時には、怪しい雲行きになっていた。やはり思

い切って山に入って正解だった。
今日は温泉に入るのも忘れてしまった。
ドアにレッドカードが３枚貼ってあった。
急に腰が重くなってしまう。どうすればいいのかわからない。赤井雄介とごはんを食べに行ってないのにこれである。
今日は金曜日である。今日出かけたオンナがいるはずなのだが、調べることができない。
６月７日だった。
休んでもいいのだが、桐内まつみは普段どおり中野の会社に出かけた。
「おはよう」
「おはよう」
少し離れた後から米田やすこの声がした。
「米田さん昨日はありがとうございました」
「昨日は米田さんも外出だったのですか？」
「なんで？」
「そんな気がして」
「忙しいからムリ」
「今日から雨だからサンプル集めにでもと思ったんです」
「それどころじゃない」
「ガンバってください」
これで昨日のアパートの３枚のレッドカードは米田やすこではないことがわかった。
睡眠導入剤のオンナは、結城麻衣子か浜野きよみの可能性が高くなった。
桐内まつみは、プリンター室で昨日の写真をプリントした。
赤井雄介はいない。休みなのだろう。土曜日だ。
今日は雨である。それもかなりの雨である。多分梅雨入り宣言なのだろう。
桐内まつみの顔は明るかった。やはり写真の方がよい。
これで、デザインブースの提案は、枠組みが出来上がった。
バックグラウンドの映像は、５月30日の下りに撮った水場の流れだ。滝ではない。ここに花があったら素晴らしかったが。欲を出してはいけない。
メインテーマの映像は滝である。桐内まつみの息遣いもあって迫力満点であ

る。
しかし、メインテーマのブースの内容が思いつかない。地球である。
メインテーマのブースだから商品のデザインをもってくることはない。
もう１度カメラの写真を見てみようと思った。

○アパートに侵入される

13時になっていた。
桐内まつみは、机の下からデカイカップラーメンを出して、コーヒーカップを持って、給湯室に向かった。
カメラを見ながらゆっくりカップラーメンを食べた。
桐内まつみは時計を見た。13時30分だった。
「やられた」
桐内まつみは悔しかった。これが仕事で忙しい日だったり審査会の日だったりしたら、終わりである。
カメラと印刷した写真をバックにしまった。もうほとんどもうろうとしている。デカイカップラーメンは食べ残している。そのまま机から落とした。ドサッという音がした。
桐内まつみは、それ以降のことは何も覚えていない。伏せて眠ったのだ。
カップラーメンを机の下に積んであったのがよくない。
どうしてこんなことに気がつかないのか腹立たしい。
「桐内さん」
米田やすこの声だった。
雑巾を持ってきて床を拭いてくれていた。
「すみません～疲れてしまって」
慌てて米田やすこから雑巾を取り上げて床を拭き始めた。
これはタイヘンなことだと思った。量を間違えれば、どうなるのか調べないといけない。帰りだったら自動車にぶつかってしまう。
まだ５つ残っているカップラーメンを袋に入れてゴミ置き場に捨てた。蓋をゼンブ開けておいた。
「今、机の下のカップラーメンを食べて眠り込んでしまいました」

「やられました」
「これは危険だと思います」
「誰も信じてくれそうもありませんが」
「そうまでしてわたしが憎いのでしょうか」
「どうすればいいのでしょうか」
桐内まつみは、先里東上にケータイメールをした。
アッという間に返事が来た。
「他に食べ物があったら捨ててください」
「身を守らないといけない」
「自宅に入られていませんか？」
ここまで読んで、桐内まつみは、バックを背負って中野駅に走った。傘がジャマである。鍵屋さんに走った。
桐内まつみは、時々、自宅の鍵を机にほうり出していたことがある。何かをバックから探した時だ。
指紋認証を付けた。
「不動産屋さんの了解が得られたら連絡をください」
桐内まつみは、不動産屋に行った。中野駅である。
「費用はすべて自分で負担してください」
「出る時は自分の費用で外してください」
覚書を書かされたが、認めてくれた。
そのままアパートに帰ってカップラーメンを調べた。３個あったのだが、少し蓋が開いている。
急になみだが溢れてきた。冷蔵庫を調べた。蓋が開いている瓶のノリを捨てた。冷凍庫を調べた。肉と魚しかない。
「大丈夫ですか？」
やってきた鍵屋さんに言われた。なみだが止まらないのだ。
「すみません～テストしてください」
桐内まつみは、右の人差し指をかざした。小さい音がして鍵が開いた。
「自宅は大丈夫かのメールを見て中野駅の鍵屋さんに走りました」
「不動産屋さんには自分で付けて外す覚書を書かされました」
「３個のカップラーメンの蓋が少し開いていました」

「冷蔵庫も調べて危なそうなものは捨てました」
「指紋認証なので、もうここへは入れないと思います」
「ありがとうございます」
「なぜこんなことになるのかなみだが止まりません」
ＰＣメールを送った。
「『なみだってなんだ』も読んでください」
「『こころの色』も読んでください
「仕掛けている人のよろいが醜悪なんだけど桐内さんによろいがなかったらここまで酷くはなりません」
「犯人は、桐内さんのよろいを傷つけたいのです」
桐内まつみは、米も捨てた。乾燥ラーメンも捨てた。ザックの中からレトルトミートソースを出してパスタを茹でた。
レトルトに穴が開いたら温められない。
桐内まつみは、『なみだってなんだ』と『こころの色』をダウンロードして読み始めた。
なみだがこれほど多いとは思わなかった。悲しいのか悔しいのか自分でもよくわからない。
「なみだは愛の戦略的武器です」
「こころは愛とよろいでシェアーされています」
「愛はこころのよろいのエリアが大きくなったら、愛のエリアを大きくするためになみだを使うのです」
さっきからずっとなみだを流している自分はよろいが大きいことになる。自分の愛が桐内まつみになみだを流させていることになる。
「犯人は、桐内さんのよろいを傷つけたいのです」
先里東上は、桐内まつみのよろいも厚いと言っている。
それは一体なんだろう。
「先里東上さんはどこにいらっしゃるのですか？」
「１度お会いしてお話を伺いたいのですが」
アッという間に返事が来た。
「ヒマですから場所を連絡してください」
「高円寺の馬屋というジェラート屋さんがあります」

桐内まつみはネットで調べた。
アパートから５分もかからない。
「８日日曜日の11時でいいでしょうか」
どんな人かわからない。
「了解しました」
「63歳です」
桐内まつみは少し安心した。またギラギラしたオトコだったらどうしようと思った。
６月８日だった。
桐内まつみは、10時50分にアパートを出た。
明らかに助けてもらっている。お礼をしないといけないが、なにをしたらいいのかわからない。
「こっちです」
ジェラート屋さんは席が少ない。
奥の席から声がした。
「暑いですね」
あたかも何度も会っているかのように桐内まつみに話しかけてくる。
「先里東上さんですか？」
「はじめまして」
先里東上はジェラートを食べていた。
「どうぞ買ってきてください」
雨である。すごい暑い。
桐内まつみはメロン味のジェラートを買ってきた。
「何かお礼をしないといけないと思ってるんですけど」
「そんな悠長なことを言ってる場合じゃありませんよ？」
「こんな状態でもカタチを気にするのは桐内さんのよろいです」
「鍵は付いたのですか？」
桐内まつみは返事に戸惑った。
「たとえば～ミスコンで優勝したら優勝できないよろいの攻撃を受けるのです」
「ミスコンで優勝する代償があるのです」

「わたしの誇りだしプライドです」

「そんなにキレイだからたくさんあるんだろうな～と思います」

「よろいですか？」

「デザインでもコンペで優勝するんでしょうね」

「負けると悔しいんでしょうね」

「勝って来ましたから」

「趣味は何ですか？」

「山に登ります」

「バイクも好きです」

「北海道ツーリングに行きます」

「ビシッと決めてですか？」

「そんなんじゃありません」

「かっこうなんてどうでもいいです」

「だれかと行くのですか？」

「いつも１人です」

「競争とかはないんだ」

「山に行くのに何を競争するんですか？」

「ミスコンだったのですか？」

「ええ」

「わたしどうしたらいいかアドバイスが欲しいんです」

「よろいを脱ぐことです」

「桐内さんのよろいを聞いていました」

「みんなわたしのよろいが気に入らないんですか？」

「憎い」

「わたしも気に入らない人います」

「桐内さんはよろいが立派です」

「たいしたことありません」

「とりあえず睡眠導入剤を使うことを止めさせなければなりません」

「桐内さんのよろいが引き起こしていることだとはいえ」

「納得できないけど身を守らないといけない」

「警察に話そうと思ったのですが」

「ええ」

「証拠みたいものがありません」

「わたしのよろいは勉強しますけど」

「もっと何かやってくるかもしれない」

ジェラート屋さんは混んできた。

「今日はこれくらいにしましょう」

「メールします」

「犯人のよろいを読まないといけない」

「わかってます」

「赤井雄介がアパートに行ってるオンナが２人います」

「歩きながら話しましょう」

先里東上は63歳には見えない。すばやく立ち上がって歩き始めた。

「わたしつけたんです」

「わたしと赤井雄介は並んで座っているんです」

「いつもウオッチされていると思います」

「赤井雄介もオンナ２人と関係してるんだからどうかと思います」

「桐内さんは愛してはいないんですか？」

「もう一緒にごはん食べたくないです」

「犯人は２人に絞られたのですか？」

「ええ」

「わたしだったら～２人のうちの１人に接触します」

「接触って？」

「先輩ですか？」

「２人とも先輩です」

「こんなことあったんだけどどうすればいいか」

「話すんですか？」

「自分で考えてください」

「このままほっといたら新しいことを考えてくるでしょうから」

「少なくと、桐内さんのアパートには侵入できなくなってるんだから」

「わたしが気がついたことになるのか」

「ええ」

「おはよう」
「おはようございます」
６月９日である。
この１週間でマカノクリエイトの展示会の提案を完成させないといけない。
１週間しかない。
それと、結城麻衣子か浜野きよみに接触しないといけない。
「桐内さんは展示会のコンペに参加するんですか？」
「ええ」
「どんなテーマですか？」
「これから考えます」
「赤井くんは？」
「３Ｄプリンター使ってやるつもりです」
「ガンバって」
桐内まつみは、コンビニカフェにした。紅茶があったのだが、これも捨てた。
「桐内さんはコンビニカフェにしたんですか？」
「今日だけ」
「おいしいですよね」
桐内まつみは、メインブースのバックグラウンドは完成しているのだが、内容を考えようとしている。テーマは地球である。今回は、滝と水と太陽にしたい。
「もしもし」
「浜野きよみさんですか？」
「仕事のことでご相談があるんですけど」
「あんたのとこ広いから行くから」
浜野きよみがやってくる。
結城麻衣子か浜野きよみに近づこうとしたのだが、浜野きよみになった。
「なんかあるの？」
「わたし展示会のメインテーマにも応募する予定なんです」
「すごいじゃない～わたしなんかテーマ見つかんないわよ」
「水と滝と太陽なんですけど」

「よくわかんない」
「滝の水を生地で表現したいんですけど」
「カーテンみたいに？」
「ちょっとこれ見せます」
桐内まつみは、メインブース用のバックグラウンドとして編集してある映像を見せた。
「これ桐内が撮影したの？」
「ええ」
「いつまで？」
「６月12日」
「名前一緒に載せますから」
「いらない～後輩のサブになんかなりたくない」
「約束はする」
「ありがとうございます」
「わたしはわたしで忙しいんだからね」
「すみません」
「晩ごはんくらいご馳走します」
「わかった」
浜野きよみは、赤井雄介と一緒に自分のアパートに入った。フツウの関係ではない。浜野きよみは、赤井雄介を１度も見ないまま帰って行った。
結城麻衣子は赤井雄介と同じインダストリアルデザインをやっている。話しかける接点がない。
「桐内さんおはよう」
「明日大阪に行ってきます」
「経費ないから１人で行ってきます」
思ったとおりである。一緒に行こうと言ったのだが、後でゴチャゴチャ言われたくないのだ。
「いただけそうですか？」
「オリエンテーションだから」
「桐内さんに詳しく伝えます」
「参加するのですか？」

「参加する」
「お昼は？」
「牛丼テイクアウトしに行きます」
「じゃ～買ってきてやる」
「お願いします」
「アガテは何事もないのか」
「ええ」
外井三郎は、牛丼テイクアウトに出かけた。
今は、睡眠導入剤を入れるチャンスをつくらないようにしている。水ボトルも止めた。給湯室のお湯をコーヒーカップで飲んでいる。
このままでは水分不足で便秘になるかもしれない。
自動販売機の紅茶を一気に飲んでいる。
17時30分になった。
「おさきに～」
桐内まつみは、小雨だったが歩いて帰ることにした。誰かつけているかもしれないが、睡眠導入剤はないし、アパートにも侵入されない。かなりの安心感があった。
アパートのドアにレッドカードが３枚貼ってあった。
桐内まつみは、部屋の中を調べた。乾燥ラーメンは置いていない。今も、コンビニで弁当を買ってきた。こうなると、侵入したかどうかわからない。
ただ、どう考えても、指紋認証を破ることは難しいと思った。だからレッドカード３枚かもしれない。

睡眠導入剤のオンナ

○浜野きよみ

６月10日の夕方だった。
「メールでオリエンテーションの内容送ったから」
「７月３日プレゼンだから用意してください」
「コンペ対象は大阪の大阪小杉クリエイトです」
「了解しました」
桐内まつみは、送られてきた内容を読んだ。
夏カレーだった。
冷たいカレーではなくて食べやすいカレーだそうだ。インドでも暑い日のカレーのレシピになっているらしい。
桐内まつみは、ラッキーだと思った。
コンペに勝てるかどうかわからないが、準備はできる。
「もしもし」
「桐内さんですか？」
「どうした？なんかあった？」
「順調ですけど変わったことありませんか？」
「大丈夫～生産準備してるんだよね？」
「そうです～」
「ガンバって」
「わかりました」
王内よしこからは、時々心配になって電話がくる。準備を進めているのだが、大きなお金が係わる。心配になるのは当然である。
21時になっても桐内まつみは夏カレーの準備をしていた。気になるのは、名前が書いていなかったことだ。
オンナの朝ごはんアガテも、最初は、オンナの朝ごはんという名前だった。
桐内まつみがアガテを発案した。
また同じように、途中で名前が必要になるかもしれないと思った。

とりあえずは、サカイ食品の夏カレーでいくしかない。
「もう次の仕事ですか～」
赤井雄介のこういうところが気に入らない。
３Ｄプリンターも一緒の部屋だから仕方がないのだが、後からイラストレーターを覗かれるのは気持ちのいいものではない。プロなのだ。桐内まつみは、決して他のイラストレーターを覗いたりしない。
桐内まつみは返事をしなかった。
「サカイ食品の夏カレーか」
前から、赤井雄介はこうだった。桐内まつみのデザインに、勝手に意見を言ってくる。
以前はデザインについて話もしていたのだが、赤井雄介が、結城麻衣子と浜野きよみのアパートに入って行くのを見て、デザインを勝手に見てほしくなくなった。デザインの話もしたくない。
無反応の桐内まつみに話しかけるすべがなくなったのか、赤井雄介は、３Ｄプリンターの方へ戻った。
「もう遅いけど」
「帰ります」
桐内まつみは、イラストレーターをメモリースティックのまま描いている。もうＭＡＣに入れっぱなしにはしない。
「中野駅まで一緒に帰りましょう」
「わたし歩いて帰るから」
「お先に」
桐内まつみは、赤井雄介と一緒にいるところを見られたくないのだ。
結城麻衣子か浜野きよみのどちらかに見られている。また何をされるかわからない。
桐内まつみは、おかしいと思った。まだいつものコンビニに着いていない。
「もしもし」
「どうしました？桐内さん」
「会社を出て４００メートルです」
「やられたんですか？」
「もうダメです」

「建物に寄りかかって座って」
桐内まつみは理由がわからなかった。結城麻衣子か浜野きよみがまだ会社にいたかどうかわからない。桐内まつみは何も食べてないし何も飲んでいない。自動販売機で野菜ジュースを飲んだだけだ。
「オンナのよっぱらいと思われたのかな」
「バックは背中にあるか」
聞き覚えの声がかすかに聞こえてきた。
「電話する相手がいてよかった～」
「誰を信用したらいいのかわからない」
「もう少し座っていましょう」
「親子で酔っぱらって座り込んでるみたいだけど」
「かなりの量をやられたんですね」
「会社から５００メートルです」
「よく電話できたと思って」
「スマホも盗まれていない」
「握り締めてました？」
「ええ」
「これで先里東方さんがいることがバレたんですね」
「犯人は見てたでしょうね」
「道路に倒れなかったのが残念かもしれないけど」
「何か飲みました？」
「自動販売機の野菜ジュース」
「一気に？」
「ええ」
「ストロー折れて給湯室に探しに行きました」
「給湯室のストローなんだ」
「１本しかなかったんです」
「誰かいました？」
「誰も」
「桐内さんがストロー折ったの誰か見てました？」
「いいえ」

「でも誰か見てた」
「給湯室のストロー１本にして睡眠導入剤入れたんですか？」
「それしか考えられない」
「立ち上がれますか？」
桐内まつみは太ももの筋肉が痛んだのではないかと思った。
「立ち上がらせてください」
桐内まつみは、先里東方に後から抱き上げてもらって立った。
「ああ～もう大丈夫です」
「歩けます」
「わたしこのままだと殺されますか？」
「事故死します」
「わたしのよろいが招いたことですか？」
「ええ」
「どうすればいいですか？」
「赤井雄介とはごはんも食べに行っていません」
「寝たことがあるのですか？」
桐内まつみは先里東方の顔を見た。
「きれいごとでは済みません」
「赤井雄介は結城麻衣子と浜野きよみのアパートに一緒に入りましたけどわたしは赤井雄介とは寝ていません」
「その２人のどちらかが犯人と思っているんだ」
「ええ」
「いまだってどこかで見てるだろうから先里東方さんも危なくなるかもしれません」
「慣れてますから平気です」
桐内まつみは、慣れてるから平気だと言ってしまう先里東方の顔を見てしまう。
桐内まつみのアパートのドアにレッドカードが３枚貼ってあった。
「コーヒーでも」
「今はこのアパートの中が１番安全だから」
「シャワーでもして落ち着いてください」

先里東方は、そのまま歩き去った。
多分、そんなに遠くに住んでいるわけではないだろう。
「先里東方さんがいなかったらわたしはどうなっていたかと思うと怖くて震えてしまいます」
「今日はありがとうございました」
「どのようにお礼したらいいかわかりません」
桐内まつみがシャワーから出た時、先里東方からメールが来ていた。
「わたしは桐内さんのゼッタイ的な味方ですからお礼などいりません」
「ふさわしいお礼を考えること自体が桐内さんのよろいです」
６月11日だった。
「桐内さんおはよう」
外井三郎とエレベーターで一緒だった。
「あとで行くから」
「わかりました」
「コンビニコーヒーなのか」
「ええ」
「赤木と出かけるから朝１番でいいか？」
「ええ」
桐内まつみは給湯室に行ってみた。
ストローが30本くらい置いてあった。１本ずつポリ袋に入っている。急いでいたので気がつかなかった。むき出しで１本ストローが置いてあった。すごい残念である。すごく注意しているのに残念である。
その日は何も起きなかった。
６月12日である。
「おはよう」
「おはようございます」
赤井雄介と外井三郎は、すでに打ち合わせをしていた。
「桐内さん今から行くけど平気？」
浜野きよみだった。
「平気です」
１分も経たないうちに浜野きよみはやってきた。ダンボール２箱を抱えてき

た。
「あんたの希望通りいったかどうかわかんないけど」
「向こう持って」
どうなっているのかわからないが、滝のように水が流れて見える。
「どうなってるんですか？」
「少し風がないとダメだから扇風機ね」
「こっちは何ですか？」
「岩」
「６月15日にどうやって応募すればいいんですか？」
「わたしが考えることじゃないわよ～映像の映像にしたら？」
「ああ～すみません～考えます」
「すごいじゃないか」
隣で話していた外井三郎が見に来た。
赤井雄介は知らん顔をしている。
「浜野さん赤井君とは仲がいいんでしょ？」
「これけなしたからキライになった」
「わかりました～映像の映像ができたらお見せします」
「わたし忙しいからいい？これで」
「完璧です」
「じゃ～ね」
浜野きよみはすぐに帰って行った。
桐内まつみは気になった。
「これけなしたからキライになった」
これは浜野きよみの自宅で作業していたに違いない。赤井雄介とケンカになったのだろう。お互いデザイナーである。確かに難しい。
浜野きよみと赤井雄介は別れたのだろうか。
桐内まつみは、会議室を予約した。今日の15時から２時間だ。デカイ会議室を１人で予約している。今日中にできたら終わらせたい。
桐内まつみは、メインブースの表題を描き始めた。どうすればいいのだろう。テーマは地球である。桐内まつみの地球は、水と滝と太陽がテーマである。

素直に、デッカイ地球があって、下に少し小さな文字で、水と滝と太陽と書いた。表題である。
「桐内さんはメインブースにも応募するのですか？」
「ダメだろうけどアイデアあったから」
「これけなしたってなに」
「なんでもありません」
赤井雄介は、そのままデザイン室に向かった。
考えないといけない。
どういうことだろうか。
浜野きよみは、どう考えても、桐内まつみに睡眠導入剤を執拗に飲ませているオンナのようには思えない。桐内なつみがキライだったら、こんなことに協力はしないのではないかと思ってしまう。
もし今日の話を信じるならば、浜野きよみは、睡眠導入剤のオンナではないかもしれない。残るは結城麻衣子である。
桐内まつみは、お昼を買いにコンビニに出かけた。おにぎりとサラダにした。そしてコンビニコーヒーだ。そして浜野きよみの布の滝と岩をつるす道具を買ってきた。
７月14日と15日のプレゼンテーションをどうするかも考えないといけない。
書類審査でバツになったらプレゼンの予算がなくなる。だから今日映像の映像を撮るのだが、３分くらいにしないとまずいだろう。多分、20テーマくらいの応募があるだろう。メインブースだ。予算があれば、浜野きよみの布の滝は移動式にしないといけないだろう。
「１階にいますけどコンビニコーヒーを買ってきました」
「取りにきてください」
赤井雄介からメールだった。
桐内まつみは、おにぎりとサラダを食べている。コンビニコーヒーも飲んでいる。
「わたし飲んでるからいらない」
「赤井君どうぞ」
こんな状態で１階になんか行けない。

ピントがズレる赤井雄介に腹立たしくなってしまう。
桐内まつみは、15時になって会議室に向かった。映像は会議室の45インチのテレビを使うしかない。浜野きよみの布の滝をくりぬいてテレビを入れたいのだが、今日は止めた。会議室の上にビニール糸を張って布の滝を吊った。そして扇風機を借りてきた。
岩の布も吊った。
あまりにも布がデカイために45インチのテレビが貧弱に見えるが仕方がない。
１分の映像の映像にした。これ以上は耐えられない。完成度やグレードを上げようと思ったらお金がかかる。
２分は、映像だけだ。桐内まつみのあえぎと滝と水しぶきと太陽である。すごい迫力がある。至近距離から水を撮っている。登山靴が見えるのもそのままである。
桐内まつみが映像の編集室を出たのは、19時だった。
慌てて会議室に向かった。片づけてない。誰もいなかった。
桐内まつみは、メモリースティックをバックにしまった。
最近は、社内を移動するにもバックを背中に背負っている。

○結城麻衣子
６月13日も終日何事もなかった。桐内まつみは、デザインブースの応募のプレゼン資料をつくった。こっちは、桐内まつみが話さないといけない。バックに、テレビを持ち込んで、プレゼンするのだ。紙にしようと思ったが、自分でしゃべる映像を撮影した。バックにテレビで滝の水辺をスクロールでながした。
商品例のパッケージは、すべて写真を使った。夏商品である。イメージで飲料もビールも夏カレーも夏スープもみんな貼り付けた。この映像をコンペの応募用紙にした。
桐内まつみは、６月14日もサカイ食品の夏カレーで忙しかった。終日写真の上に夏カレーを描いた。レモンカレーもあったら好ましいと思っていた。少し甘すっぱいカレーである。

今度プレゼンしてみないとわからないが、もしかしたら、レモンカレーのような名前がくっついているのかもしれない。
ダミーを作った。
６月15日だった。
「おはよう」
「おはようございます」
「外井三郎さんが来てくれだそうです」
「もしもし」
「ちょっと行くから」
「お願いします」
外井三郎がやってきた。
「わたしが行くことになってたんですか？」
「連絡くれ」
「なんですか？」
「２０１４マカノクリエイトに出すのか」
「ええ」
「出す前に見せてくれないか」
「今出してきました」
「外井さんに見せた方が良かったですか？」
「見たかった」
「どうせ７月14日と15日審査会があります」
「どうしてわかったんですか？」
「赤井君ですか？」
「赤井とは相談して応募してるから」
「ガンバってください」
「わたしちょっと八王子行ってきます」
「なにもないんですけど陣中見舞いです」
「なんか持っていけ」
「おいしいお煎餅買って行きます」
桐内まつみは、何かおかしいと感じていた。
中野駅のホームで１台やりすごした。

「どこかお出かけですか？」
「青梅の電気の会社」
「お仕事ですか？」
「桐内さんは今日メインブースにも応募したんですって？」
「ええ」
「よくアイデアがあるよね」
「たまたまです」
桐内まつみは、結城麻衣子につけられていたと思った。会社を出る時から後にいた。
「あんたどこに行くの？」
「八王子です」
「メーカーさんなの？」
「ええ」
「メインブースでなにやるの？」
「水です」
「わたしなんか自分のデザインブースだけで精一杯」
桐内まつみは、世間話をしている場合ではない。自分が危ないのだ。
「結城さんはどこに住んでらっしゃるんですか？」
「荻窪」
「あんたの隣に座ってる赤木君と同じマンション」
桐内まつみは、驚いてしまった。
次の質問が出てこなくなった。
「急に心配になった？赤木君と一緒のマンションだったら」
「わたしと赤木君はなにもありません」
「うわさになってるけど」
「だけどあんたの顔見たことないもんね～マンションで」
「泊まりには来てないんだよね」
「桐内さんってどこなの？」
「高円寺です」
「じゃ～赤木君は高円寺に行ってるんだ」
「来たことありません」

「イケメンだしいいよね」
「時々ごはんするけどね～近くのイタリアンのお店で」
桐内まつみは、もしかしたら結城麻衣子も外れではないかと思ってしまう。
最初から米田やすこを外したのだが、それがまずかったのかもしれない。
はっきりしたことは、赤木雄介のオンナは浜野きよみということになる。しかし、今度の滝の布の制作の事で、２人はケンカ別れしたかもしれない。
おかしなことになってしまった。
結城麻衣子と話していると、野菜ジュースのストローにまで工作して睡眠導入剤を自分に飲ませる執念など感じられない。
それとも演技しているのだろうか。
青梅行きだった。桐内まつみは立川で乗り換えた。
「桐内さんアガテはどうでした？」
「順調に生産しています」
「７月15日のマイフレッシュの展示会用の１万個のパッケージは、確実に出来上がります」
「わたしこのまま直帰します」
「マイフレッシュの展示会の打ち合わせが明日あるから行ってきます」
「桐内さんは手伝えますか？」
「空いていますけど戦力になるかどうかわかりません」
「美人が１番だよ」
桐内まつみは、コンビニおでんとおにぎりを食べていた。
「桐内まつみさんにいろいろあったことを、日時を思い出して整理して送ってください」
「無言電話も書いてください」
先里東方が何をしようとしているのかわからない。自分のためにも整理しておいた方がいいと思った。
「今日、わたしが犯人ではないかと思っていた結城麻衣子と電車で話しました」
「赤木雄介と同じマンションに住んでいることを知りませんでした」
「赤井雄介をつけたら同じマンションに入ったので、てっきりと思っていました」

「何かあてが外れた感じで困っています」
「わたしは誰から身を守ればいいのかわからなくなりました」
「今までの不審な出来事を整理しましたので送ります」

○米田やすこ
６月16日になった。
「おはようございます」
桐内まつみは、米田やすこにあいさつをした。
「おはようございます」
浜野きよみも結城麻衣子も睡眠導入剤のオンナではない気がする。もう１度米田やすこを確かめようと思った。
「赤井君おはよう」
「どうしたんです？」
「なんで？」
「フツウじゃないから」
「赤井君は米田さんがスキでしょ？」
「なに言ってんですか～」
「違うの？」
「米田さんが怒ります」
「なんで？」
「米田さん結婚するから」
「いつなの？」
「８月31日です」
桐内まつみは、もうどうにもならないと思った。結婚が近いオンナが睡眠導入剤のオンナにはならない。
赤木雄介に近づく桐内まつみが気に入らないオンナが他にもいるのだろうか。
最近は、赤木雄介とも食事には行かない。
桐内まつみは全くわからなくなった。
「赤木君から聞いたのですが、結婚されるんですか？」

「８月31日」
「桐内さんには招待状出してなくてゴメン」
「おめでとうございます」
お昼は今日もコンビニに行った。桐内まつみは、しっかり自分を守っていた。
「桐内さんちょっと前のカフェにいるんですけど出られますか？」
「行きます」
外井三郎からだった。何かあったのだ。
「ああ～ゴメン」
「どうしたんですか？」
「７月15日のマイフレッシュの展示会なんだけど」
「山際聡子が桐内まつみは出さないでくれ」
桐内まつみは、少しはこうなるのではないかと予想していた。
「北条食品の社員中心にやるのだそうです」
「アガテの名前そのものが桐内さんの提案でおかしいとは思うんだけど」
「お客さんで行くのはいいんでしょ？」
「もちろんだけど」
「外井さんはどうされるんですか？」
「毎朝10時まで下働きで行きます」
「久野さんと２人です」
「下働きってなんですか？」
「サンプル運んだりです」
桐内まつみは、久しぶりにお米を買った。いつものコンビニである。カレーをつくった。１人分など作れないから明日もカレーである。
カギを指紋認証にしてアパートの安全は守られていると思っている。
会社では、食べかけのカレーなど放置できない。
「睡眠導入剤のオンナの候補の１人の米田やすこが８月31日に結婚することを知りました」
「いくらなんでも結婚を前にしてわたしに睡眠導入剤を飲ませることはないと思います」
「今のところわたしの身は守れていますが、犯人が見当もつかなくなりまし

た」

「どうすればいいですか？」

「しばらく身を守ることに油断をしないように」

「どこかでミスを犯すと思います」

「犯人です」

「桐内さんはミスを犯さないように」

先里東方に泣き言を言ってもどうにもならないのだが、ホントに困ったのだ。

桐内まつみのよろい

○ダントツの桐内まつみ

しばらく、桐内まつみは、身を守ることに慣れてきて食事を中断することもなくなった。晩ごはんは外で食事をしない。
７月２日だった。外井三郎とサカイ食品のレトルトカレーのプレゼンテーションの打ち合わせがある。
朝１番に外井三郎がやってきた。
「おはよう」
「おはようございます」
「今日はごはんを炊いてレトルトカレーを食べてみようと思う」
「食べたこともないのに明日話をするのは気が引ける」
「用意してくれ」
「小会議室を借りておく」
「何時ですか？」
「11時」
「わかりました」
桐内まつみは、試験機材になっている小さな炊飯器を小会議室に持ってきて、コンビニで無洗米を買った。別に、出来上がりのごはんを買った。電子レンジで温めて食べるごはんだ。そして、サカイ食品のレトルトカレーを買った。
桐内まつみは、用意しておいた夏カレーのダミーを並べた。５つある。水と滝と太陽である。まぶしい光から水が落ちてくる。レモンカレーとキャロットカレーとオニオンカレーとほうれん草カレーとただの夏カレーである。
「ああ～いいじゃないか」
「フツウじゃないけど」
サカイ食品だけではなくて、売れ筋のレトルトカレーを並べてみたが、フツウではないことがわかる。そもそも夏カレーそのものがフツウではない。
「野菜カレーなのか」

「レモンは野菜じゃないか」
「明日行ってみないとよくわかりません」
「そうか」
「わかった～最初のお礼を少し言ってすぐに桐内に渡すから」
「わかりました」
「じゃ～食べてみよう」
炊飯器からごはんをついで横の卓上コンロで温めておいたレトルトカレーを取り出してごはんにかけた。
「どうぞ」
「桐内さんもどうぞ」
「わたしはこっちのごはんを食べます」
「なんだ」
レトルトカレーと一緒に温めておいたごはんである。
「炊飯器のごはんはおいしいですから」
「オレもそれを少しください」
桐内まつみは、炊飯器をずっと見張っていることができない。
もしかしたら、睡眠導入剤のオンナが睡眠導入剤を入れるかもしれない。
サカイ食品のレトルトカレーと一緒にサカイ食品のごはんを買ったのだ。
すごい用心している。
「炊飯器のごはんよりこっちのごはんの方がおいしいな～」
結局、炊飯器のごはんは２合しか炊いてないのにほとんど残してしまった。
桐内まつみは、炊飯器のごはんを捨てた。
12時30分だった。
「オレ動けないからちょっと来てくれ」
外井三郎から電話だった。
桐内まつみは、もう確実だと思った。慌てて走って外井三郎の席に向かった。
炊飯器が危ないと思ってごはんを買ってきた。桐内まつみは炊飯器のごはんを食べていない。ただ、炊飯器で炊くように言った外井三郎のてまえ、両方にしたのだ。
「どうしたのですか？」

「もうろうとしてる」
「桐内は何もないのか」
「平気です」
「じゃ～レトルトカレーがおかしいわけじゃないのか」
「サカイ食品さんのごはんとカレーですから」
「10時ごろ食べたおかしの賞味期限か」
「わかりません」
「少し横になりますか？」
「ストレッチャー借りてきます」
「ストレッチャーまで自分で行く」
外井三郎は、もうろうとしているのだろうが、ゆっくり歩いて休息室に向かった。小さな小部屋だがストレッチャーが置いてある。
「誰にも言うな」
「すぐ良くなるから」
「わかりました」
もう間違いない。睡眠導入剤のオンナが炊飯器に睡眠導入剤を入れたのだ。
ただ、外井三郎も炊飯器のごはんは１合も食べていない。
13時30分になって、桐内まつみは、休息室に行ってみた。
外井三郎はいなかった。
外井三郎は、自分の席でメールをしていた。
７月３日だった。
桐内まつみは、大阪のサカイ食品のプレゼンルームにいた。外井三郎と一緒である。東京から来るということで、13時30分にしてくれている。
時間は30分だったが、反応は良かった。明日結果を知らせるとのことだった。
コンペの相手は、大阪小杉クリエイトである。
桐内まつみは、帰りの新幹線の中で、昨日外井三郎が気分がワルクなったことを話すかどうか迷った。その話をすると、桐内まつみがターゲットであることを話さないといけない。
やっぱり話せなかった。あまりにもフツウではないからだ。証拠もない。睡眠挿入剤のオンナを特定できてもいない。

「今日７月３日に大阪のサカイ食品にレトルト夏カレーのパッケージのプレゼンテーションに行きました」
「そのことで昨日７月２日に、社内で打ち合わせをしました」
「レトルトカレーをお昼前に食べようということで外井三郎さんと炊飯器でごはんを炊いて食べました」
「わたしは危ないと思ってレトルトカレーと一緒にごはんを買ってきて食べました」
「外井三郎さんは、12時30分頃、もうろうとして気分がワルイと電話してきました」
「ストレッチャーに１時間眠っていました」
「炊飯器が危ないと思ったのですが、そのとおりになりました」
「すごい気を張って守っていますが、わたしは危ないと思っています」
「犯人が誰か特定できないでいると思います」
「辛抱してガンバっていてください」
「必ず好ましい方向に進みますから」
桐内まつみは、辛抱も嫌いだし、こんな楽観的なメールをくれる先里東方もキライになるかもしれないと思った。
７月４日だった。15時だった。外井三郎がやってきた。
「サカイ食品注文もらった」
「サカイ紙業でやってくれとのことです」
「責任はマカノクリエイトだ」
「トマトと人参とほうれん草の３つに決まったそうだ」
「わかりました」
「明日サカイ紙業に行って仕事の仕方の相談をしてくるから」
「プレゼンしたパッケージの原案を修正してください」
「明日持っていくのですか？」
「サカイ食品にも寄ってくるから」
「夏カレーだから来年でしょ？」
「急に今年やると言い出した」
「もう７月ですけど」
「桐内のパッケージが気に入ったらしい」

「スケジュールは？」
「明日相談してくる」
「じゃ~18時まで待ってください」
「このメモリースティックに入れてくれ」
「承知しました」
７月５日だった。土曜日だが外井三郎は大阪に出かけた。桐内まつみは中野に出勤した。
「明日申し訳ないけどサカイ紙業の森野芳郎さんと相談してきてください」
「森野芳郎さんは25歳で王内紙業の王内よしこさんのような仕事をしています」
「至急に見積をもらわないといけないのですが、桐内さんと相談しないと仕様がわからないでしょう」
「パッケージ案はサカイ食品にも示しましたが了解です」
「数量は初回各40万です」
「８月５日サカイ食品のサカイ工場納品です」
「パッケージ試作上がり７月８日です」
「７月８日もサカイ紙業に行ってください」
「了解しました」
多分、新幹線からメールが来ていると思った。
桐内まつみは、こういうつもりではなかった。来年夏用だと思っていた。それでも自分のデザインが採用されるのはうれしい。
仕様書案をつくりはじめた。
21時までかかった。
「コンビニ行きますけど何か買ってきますか？」
「平気です」
「おでんやってますけど」
「いいです」
赤木雄介も忙しいのだろう。しかし桐内まつみは断った。
「桐内さんコンビニコーヒーを買ってきました」
「ありがとう」
そのまま飲まずに、帰りに給湯室で流した。

アパートの玄関にレッドカードが３枚貼ってあった。
７月６日だった。
桐内まつみはサカイ紙業の森野芳郎と会っていた。桐内まつみを見て、一瞬赤面した。こんな美人が来るとは思わなかったのだろう。
具体的な仕様の相談をした。そして写真撮影を行わずに、ＣＧで修正することにした。桐内まつみは、海老名一郎に20万円で頼んだ。
「もっと写真を鮮明にしたかったのですが撮影の日程がないので海老名一郎さんに20万円でＣＧを使って鮮明にするように依頼しました」
「今送ったので明日の朝には桐内に送ってくれます」
「わかった」
７月７日だった。２０１４マカノクリエイトの書類審査の発表日だった。
朝１番に廊下に貼り出された。
メインブースの地球が３人にデザインブースが20名だった。
桐内まつみは、メインブースにもデザインブースにも選考されていた。
赤井雄介はデザインブースに選考されていた。
浜野きよみも結城麻衣子も米田やすこもデザインブースで選考されていた。
「桐内さんメインテーマの予算10万円とデザインテーマの３万円の予算を取りに来てください」
まだ机に座っていないのに、２０１４マカノクリエイトの事務局から電話があった。
「桐内さんすごいですね～」
「どんなのやるの？」
ほとんどの人がこう言う。
「14日か15日の審査会で観ていただけますか？」
桐内まつみは、海老名一郎が送ってくれた夏カレーのパッケージ写真のＣＧでの修正版を、森野芳郎に送った。
明日７月８日には、もう１度サカイ紙業に行くことになっている。
桐内まつみは、13万円を持って出かけた。１日だけ液晶大画面モニターをレンタルしようと思った。交渉になるだろう。80インチが好ましい。それと、移動できる舞台装置のようなものだ。これもレンタルしたい。
１週間しかない。

まず、液晶大画面のレンタル屋さんに向かった。
「もしもし」
「桐内まつみです」
「メインブースのわたしのプレゼン日はいつでしょうか」
「15日ですか？」
「デザインテーマも15日ですか？」
「機材をレンタルするのに１日だと安くなるので」
「よろしくお願いします」
桐内まつみは、80インチの液晶モニターを５万円で借りた。交渉した。７月15日１日だ。
「こんなような舞台を動かすようなセットはないでしょうか」
わかりずらいと思って、図を描いた。
移動式のジャバラの屏風があった。高さが２メートルもある。
80インチの液晶モニターの使い方を教わった。７月14日は貸出日ではないので、ジャバラの屏風と80インチモニターをセットしてもかまわないということだった。７月15日７時に中野のマカノクリエイトに運んでもらうことにした。運賃も含めてジャバラの屏風のレンタル料は４万円だった。
まだ１万円残っている。10万円を越えたら失格になる。領収書を見せないといけない。
桐内まつみは中野駅で回転すしをテイクアウトして会社に帰った。できるだけ会社で食べ物を広げたくはないのだが１人で回転すしは食べられない。
７月８日だった。
桐内まつみは、サカイ紙業にいた。
驚いたことに、パッケージの試作が出来上がっていた。
「小ロットのパッケージもやりますから」
「今日の朝出来上がりました」
「いままでにない斬新なパッケージだと思います」
「トマトと人参とほうれん草の色を思いっきり目立つようにしました」
桐内まつみは、海老名一郎と森野芳郎のセンスの良さを感じた。
桐内まつみは、その足でサカイ食品に寄って、夏カレーの試作パッケージを渡してきた。

みなさん無言だったが、斬新だと思ったことは間違いない」
７月９日だった。桐内まつみは、メインテーマの機材と同じ機材のレンタル屋さんに出かけた。朝１番だ。デザインブースの背景の滝の水辺と太陽の映像である。40インチのモニターを２万円で借りた。15日の朝一緒に運んでもらうことにした。
デザインブースは、殺風景だが桐内まつみが自分でしゃべる。試作のパッケージモデルの多さでもアピールする。持ち時間は10分である。メインブースの持ち時間も10分だが、桐内まつみは最初の案内だけで何もしゃべらない。沢を登る桐内まつみのシューズとあえぎが臨場感を保つ。滝を登る苦しさが伝わる。
桐内まつみは、中野駅のラーメン屋さんに入った。ここのところ、桐内まつみに隙はない。睡眠導入剤を入れるチャンスがない。
「どこへ行ってたのですか？」
「いろいろ」
「外井さんから聞かれたから」
「もしもし」
「何か用事でしょうか」
「どこに行くか書いて行け」
「ケータイにかければいいでしょ？」
「それはそうだけど」
「なんかありました？」
「なにかあったわけじゃない」
桐内まつみは、そのまま電話を切った。
わけがわからない。
「桐内さん帰ってきた？」
浜野きよみだった。
「ワルイんだけどさ～わたしも手伝ってあげたからあんたも手伝って」
「いいですけど」
「レインファッションをやってるの」
「ちょっと見せるから」
浜野きよみは、７月14日か15日のプレゼンテーションのスライドを開い

た。
「ああ~いいじゃないですか」
「あんた雨の日のレインファッションを３枚くらい描いてくれない？」
「渋谷と公園とニューヨーク」
「難しそう」
「わたしだって必死になってやったんだから」
「いつまでですか？」
「明日の晩ほしい」
桐内まつみは、浜野きよみからスライドをもらったが、パソコンでニューヨークを描くにはフィットしない気がした。
ネットから、ニューヨークと公園と渋谷の写真をプリントした。
Ｂ４のデザイン紙を取り出して、ニューヨークを手書きで描きはじめた。その中に、浜野きよみのレインファッションをはめ込む。
忠実に浜野きよみのレインファッションを描いているのだが、手書きだと色もピッタリと一致しない。
ただ、ニューヨークでも浜野きよみのレインファッションはフィットすると言えるようには表現できる。
22時になっていた。
「カップ麺をつくりました」
赤木雄介がお湯を入れてカップラーメンを持ってきた。
桐内まつみは、デザインケースにニューヨークと公園と渋谷のレインファッションを収めて、メモリースティックをしまって電源を落とした。
「赤木君ありがとう~自販機のとこで食べて帰るから」
「おさきに」
カップ麺にはトラウマがある。
桐内まつみは、熱かったのだが、カップ麺を抱えたまま中野の会社を出た。買い物袋に移して歩いた。コンビニで捨てるつもりである。
コンビニで親子丼を買った。アイスを１本買ってイスに座って食べた。もしかしたら、だれかがつけていると思ったのだ。
５分経ったが誰も知っている人は入ってこなかった。
７月10日だった。

「すごいじゃない～１日でできちゃったの？」
「手書きにしないとニューヨークが描けないから浜野さんのレインファッションも手書きにしたんですけど」
「ああ～いいわよこれで」
「渋谷ファッションなのね～これは」
「そう思いました」
「長いレインシューズと膝上15センチのレインウエアーが渋谷にマッチします」
「桐内さんありがとう」
「お互いさまです」
「赤木君はこのファッションどう言ってるんですか？」
「見せてない」
もしかしたら、別れたのかもしれないと思った。
赤木雄介がデザイン室から出てきた。
「まとまったら見せるから」
「わかりました」
浜野きよみは慌てて帰っていった。
素振りが、不思議だった。
７月14日は、ほぼ46名全員が会議室に集まった。今日は12名のデザインブースのプレゼンがある。
浜野きよみと赤木雄介もプレゼンする。
「もしもし」
「桐内さん元気ですか？」
「明日サンプルの１万の出荷の日だけど」
「平気です～もうできています」
「ありがとう～わたし明日会社のプレゼンで行けないから」
「平気です」
王内よしこはいつもテンションが高い。わかりやすくていい。
全員が審査用紙を持っていて審査するのだが、多分、社長の野中俊二の一声になることは、みんなよくわかっている。
赤木雄介のプレゼンがはじまった。

３Ｄプリンターで試作品を試作している。テーマがわからない。３Ｄプリンターがテーマなのだろう。
浜野きよみのプレゼンは14時だった。
「３Ｄプリンターなんでもできそうでしょ？」
「どうでした？」
桐内まつみは返事に困った。
「ごはんに行きましょう」
「わたしメロンパン買ってくる」
桐内まつみは、赤木雄介が返事をする前にバックを背負った。
とにかく用心しないといけない。
浜野きよみのプレゼンは46人を惹きつけた。
たまたま梅雨時期でもあるのだが、レインファッションは絶好だった。
15時30分に12のデザインブースのプレゼンがすべて終わった。
「桐内さんありがとう」
「結果はわかんないけど上々だった」
「よかったと思います」
「あんたの３枚のイラスト効いたわよ」
口を挟みそうな赤木雄介を見て、浜野きよみは帰って行った。
７月15日になった。
今日は最初にメインテーマのプレゼンが３つある。
桐内まつみのプレゼンは最初である。
８時に玄関で待っていた。ジャバラの屏風と80インチのモニターである。
「すみません～上まで運んでいただけますか？」
まだ誰もいない。
ジャバラの屏風を拡大させて。扇風機をつけた。滝の水がいかにもになる。
岩もセットしてある。
用意したパソコンで80インチのモニターを動かしてみた。
バッチリである。
最初でよかった。
ジャバラの屏風を閉じてパソコンを外した。
誰も見ていなかった。

桐内まつみは注意深い。
40インチのモニターは、同じ15日になったのでキャンセルした。
「どうもありがとうございました」
「17時30分に取りに来ていただけますか？」
まだ８時30分だった。社員が出社してきているのだが、なんのことかわからない。
９時30分になって、桐内まつみは、会議室に入った。用心深い。何も変わったことはない。
10時になって全員集まって、メインブースの３つのプレゼンが始まった。
「テーマは、地球でサブテーマは水と滝と太陽です」
「わたしの話は何もありません」
「それではどうぞ」
桐内まつみはジャバラを開いて扇風機をつけて滝の真ん中に80インチモニターを持ってきて、パソコンを動かした。
20秒の表題が続いた。地球と水と滝と太陽である。
すでにみんな驚いていた。
沢と滝を登る桐内まつみのあえぐ声と滝の水の音がシンクロする。２メートルの滝を登る。水しぶきが降ってくる。
時より太陽が眩しい。
桐内まつみのシューズだけが写っている。
10分映像を見るだけのプレゼンなのだが、息をのんでしまう場面もあってながく感じられなかった。
最後に、地球と水と滝と太陽の表題が出てきて。終わりが出てきた。
「どうもありがとうございました」
桐内まつみは、パソコンを80インチモニターから外して、会議室の外に持って出た。浜野きよみが出てきてジャバラの屏風を閉じて、会議室の外に運んでくれた。けっこう重い。パラパラと出てきて、手伝ってくれた。扇風機を会議室の外に出した。
「どうもありがとうございました」
桐内まつみは、２つのメインブースのプレゼンテーションを見なかった。扇風機を返しに行った。ジャバラ屏風をエレベーターホールに持っていった。

昼休みに、浜野きよみの滝の布を、ジャバラ屏風から外さないといけない。
そのままエレベーターホールで滝の布を外した。
「なにか買ってきますか？」
「行くから平気」
「すぐ終わるから」
赤木雄介は、何度も買ってきてやると言ってくれるのだが、用心している。
午後は13時30分からである。
桐内まつみは、パソコンを持って会議室に向かった。40インチのモニターを動かしてみた。
14時が桐内まつみの時間である。
「カップ麺買ってきてあります」
「どうもありがとう」
「食べないとチカラが出ません」
「ありがとう」
桐内まつみは、お昼を食べるつもりがなかった。
自動販売機のコーナーでジュースを飲んだ。
デザインブースの映像はスクロールにしてある。
会議室の外でスクロールさせた。
14時になって、80インチのモニターを会議室に移した。浜野きよみがすぐ出てきて手伝ってくれた。
「デザインブースの夏商品のプレゼンテーションです」
「テーマは滝と水辺です」
80インチモニターから水辺の川のせせらぎの音がする。時々滝になってしぶきがくる。そんなバックグラウンドの中で桐内まつみのプレゼンは続いた。
夏商品である。ビール缶のデザインにピッタリだが、夏専用商品にはしたくないかもしれない。夏カレーもぴったりだ。飲料だってピッタリ。水羊羹などにもピッタリである。
17時30分になっても結果発表はなかった。モメているのだろうか。
桐内まつみは、ジャバラ屏風と80インチモニターを取りに来た運送会社の若者に応対した。
「結果はどうなんですか？」

「まだ発表されてない」
「ガンバってください」
「どうもありがとう」

○殺意
「おめでとう」
米田やすこがやってきた。
桐内まつみは、伝票をつけて２０１４マカノクリエイト事務局に報告書を書こうと思った。
まだ会議室には行っていない。
「まだ見てないの？」
けげんな顔をしている桐内まつみを見て米田やすこが言った。
まだ入社３年目である。もしデザインブースでも受かったらラッキーである。
桐内まつみは、会議室に向かった。
みんなが自分を振り返って見ている気がした。
驚いたことに、メインブースの担当は、桐内まつみの地球ー水と滝と太陽だった。デザインブースの当選者は、桐内まつみと浜野きよみの他７名だった。
赤木雄介も結城麻衣子も米田やすこも選ばれなかった。
「わたしあんたのおかげだよ」
「あのイラストの３枚」
「ありがとう」
「とんでもありません」
「わたしこそ浜野さんに布の滝をつくっていただかなかったらどうなってたかわかりません」
「２０１４マカノクリエイトのメインブースとデザインブースに選ばれた方は、明日７月16日10時に会議室に集まってください」
２０１４マカノクリエイトの事務局の貼り紙があった。
「もしもし」

「桐内？」
「どうだった？」
「メインブースもデザインブースも受かりました」
「ウソだろう？」
「ホントです」
７月22日のアガテのマイフレッシュの展示会の打ち合わせに行っていた外井三郎から電話があった。
「赤木はどうだったんだ」
「直接電話してください」
「ダメだったのか」
「自信満々だったのに」
桐内まつみは疲れた。
「桐内さんですか？」
「サンプルの１万出荷した？」
「大丈夫です~出荷しました」
「２０１４マカノクリエイトおめでとうございます」
「なんで知ってるの？」
「いま野中社長さんにお父さんが報告したら教えてくれたそうです」
「ああ~こうなるとは思わなかった」
「ガンバってください」
「わたしもうれしいです」
今日は早く帰ろうと思った。
明日は10時に集まらないといけない。
「先里東方さん~お願いです」
「どこですか？」
「コンビニの手前です」
「建物に寄りかかってて」
桐内まつみは、意味がわからなかった。注意している。
それっきり意識がなかった。
何時間経ったかわからない。
「東京は星が見えないんですね」

先里東方が並んで座っていた。
「おそば屋さんに怒られて少し移動しました」
「もう少し座っていましょう」
「お腹が空きました」
「お昼も食べていません」
「カップ麺ですか？」
「カップ麺は食べていません」
「飲み物は？」
「帰りに自動販売機でオレンジジュースです」
「席を外しませんでした？」
「外しません」
「最近ずっとオレンジジュースですか？」
「オレンジジュースしか飲んでいません」
「目を離しませんでした？」
「おめでとう言われたから」
「おめでとうって？」
「会社の展示会でメインブースとデザインブースのコンペに当選しました」
「目を離したのですか？」
「１分もないと思います」
「誰がすり替えたかわかりませんか？」
「誰か来た感じがします」
「誰ですか？」
「わかりません」
「他にはないのですか？」
「いつもジュースは一気に飲んでいますから」
「コンビニでごはん買って帰りましょう」
桐内まつみは立ち上がってみた。
なんでもない。
登山のスラックスを履いていて良かったと思った。
「先里東方さんありがとうございました」
「ワルに車道に転がされてもわたしはわからなかったと思います」

「殺人だけど」
「わたしは守れるのでしょうか」
アッという間に返事が来た。
「私はたまたま近いところにいるしヒマだからすぐに電話してください」
「社内のコンペで優勝したらしいいし、ますます狙われると思います」
「赤木雄介さんと仲がいいから狙われると言っていましたが違うかもしれない」
「きょう狙われたのはコンペで優勝したからでしょう」
「桐内さんのよろいを傷つけたいのです」
「注意してください」
桐内まつみは、先里東方が言っているよろいが、自分には障害になるほど厚いとは思っていない。
「明日の18時ごろジェラート屋さんで待っていていいですか？」
「わたしはよろいが厚くないと思っているんです」
「隣のベトナム料理にしてください」
７月16日だった。
８時30分に桐内まつみが中野の会社の15階のエレベーターを降りた時、床にプリントされた写真が散らばっていた。
桐内まつみだった。そば屋の建物に寄りかかっている。泥酔状態であらわもない座り方のように見える。
桐内まつみは、プリントされた写真を先里東方に送った。
もしかしたら昨日の栄冠は地に墜ちたかもしれないと思った。
「桐内これはなんだ」
「昨日か」
外井三郎は怒りの表情で桐内まつみに迫った。
「１番になって酔いつぶれたのか」
桐内まつみは、返事をしなかった。
予想外のことが起こったのだ。
「何事もなかったかのように振舞ってください」
その時、先里東方からケータイメールがあった。
いきなり桐内まつみにスイッチが入った。

途中になっていた２０１４マカノクリエイトの事務局へのお金の報告を書きはじめた。メインテーマ10万円とデザインテーマ３万円である。
外井三郎は、いきなり仕事をはじめた桐内まつみを見て、舌打ちして帰っていった。
桐内まつみは、２０１４マカノクリエイト事務局にメールを送った。
「桐内さんどうしたの」
浜野きよみがやってきた。
「想像もできない」
「誰がこれをプリントしたかが問題なの」
「わたしずっと狙われてる」
「黙ってて」
「同じようなことが何度もある」
「わたしはずっと警戒してるんだけど昨日は甘かった」
「黙ってて」
「自分でお酒飲んだんじゃないの？」
「黙ってて」
10時になって、桐内まつみは会議室に向かった。
「それでは表彰します」
「表彰された方は、９月６日と７日の展示会のディレクターを務めることになりますから、大きな責任を感じてください」
「メインテーマの展示会予算は１００万円です」
「デザインテーマの展示会予算は30万円です」
「任せますからガンバってください」
「それでは表彰します」
「名前を呼ばれたら前に出てください」
「桐内まつみさん」
「メインテーマ賞金１００万円とデザインテーマ30万円の賞金を現金で渡します」
社長の野中俊二が中央に進み出た。桐内まつみは躊躇した。
「桐内さんどうぞ」
「承知しています」

桐内まつみは驚いて前に出た。
浜野きよみたち８名のデザインブースのコンペの勝者は、驚いた顔をした。
もしかして社長は、今日の桐内まつみの写真を見ていないかもしれないと思った。
「ありがとうございます」
桐内まつみは、なにがどうなっているのかわからないままだった。
野中俊二の「承知しています」はなんだろうか。
「どうなったんですか？」
赤井雄介が帰ってくるなり言った。
桐内まつみは、賞金の１３０万円をバックにしまった。
「感謝しています」
短いメールを野中俊二に送った。
「どうなったんですか？」
桐内まつみは赤木雄介の顔を見た。
「なにが？」
桐内まつみは、９月６日と７日の展示会を考えようと思った。
本物の水と滝と太陽をやろうと思った。桐内まつみは、イラストを描きはじめた。棒の折れ山の滝が好ましい。２回も登って体験している。どこかを再現することが好ましい。映像は、今のままを使わないといけない。
メインブースは説明があるわけではないので、大画面のプロジェクターを持ってこれるのではないかと思った。
桐内まつみは、編集室に向かった。15時から１時間予約をした。
再現する滝を探したいのだ。
桐内まつみは、誰かに何かを言われる前に、回転すし屋さんに向かった。もう１人では恥ずかしいなどと言っている場合ではない。
桐内まつみは、ベトナム料理のお店に入るのははじめてだった。
先里東方は、すでに来ていてウーロンハイらしきものを飲んでいた。
サラダっぽいつまみを食べていた。
「この席はこっちの声は聞こえませんので」
「私はごはんを食べているので一緒でいいですか？」
「ええ」

「お酒を飲みますか」
「ウーロン茶で」
先里東方は、ベトナム料理を頼んだ。
「食べられないのありますか？」
「ありません」
「ベトナム料理は野菜が多いので女性に人気です」
「賞金が出たんですか？」
「１３０万円いただいたのでご馳走します」
「じゃ~ワリカンにしましょう」
「針のむしろですか？」
「そうです」
「社長の野中俊二だけがおかまいなしの感じです」
「みんなは今日でアウトと思っていたようです」
「睡眠導入剤のオンナは残念だと思います」
「このままだとわたし殺されそうです」
「殺意になってきました」
「これはなんですか？」
３種類も料理が運ばれてきた。
「いただきます」
ベトナム料理はおいしい。
桐内まつみははじめてだった。
「これはなんですか？」
「桐内さんへの嫉妬です」
「桐内さんのよろいが気に入らない」
「嫉妬ってよろいですか？」
「ええ」
「桐内さんのよろいが立派であることが気に入らない」
「昨日桐内さんがコンペで優勝したことが更に嫉妬感を大きくしました」
「殺意にまでなるのですか？」
「今日の写真はなんですか？」
「桐内は立派ではなくて実はこうだ」

「昨日のコンペの優勝はキャンセルされるはずだった」
「睡眠導入剤のオンナにとっては」
「わたしのよろいって～すごいとは思えませんけど」
「桐内さんのよろいは立派で厚いです」
「だから壊そうと誰かがします」
「よくわかりません」
「桐内さんには表裏があります」
「何をテーマにして１番になったのですか？」
「棒の折れ山という滝を登る山をわたしが登っている映像です」
「足元しか写りませんがわたしの息遣いがすごいです」
「その映像は桐内さんの裏です」
「裏ってなんですか？」
「よろいではないことです」
「どうせまだ新米だからと思ってるからよろいがなくできたんです」
「来年のコンペは、桐内さんはよろいに負けるでしょう」
「わたしが優勝者？」
「だいたい人はそうなります」
「どうすればいいのですか？」
「ゼロに返せばいいんです」
「なるほど」
「桐内さんは来年は優勝できないでしょうが、優勝者に嫉妬するから、自分が殺人者にならないように」
「怖い話しですけど」
「よろいってそういうものです」
「防ぐにはどうするんですか？」
「桐内さんが自分だけのグッドを求めるのではなくて、みんなのグッドを求められるかどうかです」
「わたしは今は自分のことしか考えていません」
「そこがよろいですか？」
「ええ」
「キライですか？」

「ええ」
「展示会では、たくさんのお客さんに喜んでいただかないといけない」
「あなただけではできない」
「今のままだったら、桐内さんに、おいしいところをゼンブ持って行かれそうなんです」
桐内まつみは、ウーロンハイを１杯飲んだ。
いい気持ちだった。先里東方と話していると気が休まる。
８６４０円をキッチリワリカンにした。
おいしかった。
７月17日になった。
気まずいエレベーターになる。何を話したらいいのかわからない。
「おはようございます」
それだけである。
15階で降りる時も心配だった。また違う写真がばらまかれてるのではないかと心配である。
なにもない。
「おはよう」
「おはようございます」
コンビニコーヒーが置いてあった。
「ついでだから買ってきました」
「わたし買ってきたから赤木君どうぞ」
机にあったコンビニコーヒーを赤木雄介の机に持っていった。
ゼッタイなのだ。まだ誰が睡眠導入剤のオンナであるのかわかっていない。
注意しないといけない。
桐内まつみは、９月６日と７日の２０１４マカノクリエイト展示会のメインブースのイラストを描いた。スペースの大きさは聞いている。展示会の入ってすぐに横７メートルと通路である。
ここにホントに水と滝と太陽を持ってくる。太陽は証明を使わないといけない。
棒の折れ山の滝のいくつかを横に並べようと思った。
写真を並べてみてバランスを見ている。

水は循環させるのだが、何リットルあればいいのだろうか、何トンかもしれない。
とにかく自分のイメージを固めて誰かに相談しないといけない。
今日は誰も桐内まつみに寄って来ない。
赤井雄介すら、朝のコンビニコーヒーだけだ。
「展示会の全体を仕切っている展示会屋さんはどこですか？」
桐内まつみは、２０１４マカノクリエイトの事務局の田部愛に電話をした。
「メインブースのセットのことですか？」
「わたしが描いているセットが作れるかどうか知りたいんですけど」
「わたしに見せてくれますか？だいたいわかります」
15時になって田部愛がやってきた。
「本物の滝を作ろうと思っているんですか？」
「ええ」
さすがに田部愛も驚いた。
「予算は１００万ですよね」
「ええ」
「ゼンブ使えるのですか？」
「プロジェクターを映像で使わせてください」
「だったら１００万ゼンブ使えます」
田部愛はその場で、ュノンオフィスに電話をした。
「今日18時に来るって言うんだけど」
「わたしは平気です」
「こんなのやったら展示館全体のつくりものが喰われちゃうと思うんですよね」
桐内まつみも、田部愛の言っていることがわかる。
田部愛は桐内まつみの２つ先輩で服飾デザイナーであるが、社長秘書をやっている。２０１３マカノクリエイトの展示会全体を仕切っている。
18時だった。
応接室に向かった。
ユノンオフィスのチーフデザイナーという肩書きの湯浅修二が待っていた。
「こちらメインブースのディレクターの桐内まつみさんです」

「メインブースでやりたいことがあるんですけど意見をお伺いしたいんです」
「わかりました」
桐内まつみは、まだ完成してはいないと言いながら、ほぼこれでいこうと思っているイラストを示した。
どこから水が流れるといったコメント付である。
「このプロジェクターはなんですか？」
「滝を登っている映像です」
「見せていただけますか？」
桐内まつみは、その場で、パソコンで映像を見せた。
「これはすごいな～」
「１００インチの液晶モニターを持ってきたほうがいいです」
「水は循環させるのですか？」
「ええ」
「モデルをつくってシュミレーションしないとわかりませんね」
「水の量ですか？」
「ええ」
「ュノンさんでできるんですか？」
「できますが予算はいくらですか？」
「１００万円です」
「１／10くらいのモデルを作って確かめてみますので、返事は待っていただけますか？」
「いつまで待てばいいですか？」
「３日、７月21日です」
田部愛は桐内まつみを見た。
「承知しました」
「映像とこのイラストは渡してかまいませんか？」
「ええ」
田部愛はメモリースティックを持ってきて映像をコピーした。
７月20日だった。
桐内まつみは、八王子の王内紙業に向かった。15時にアガテのパッケージ

80万箱の初回出荷がある。

「こんにちわ～」

「すみません～迎えに行けなくて」

「いいの～忙しいんだから」

「もうすぐ積み込みます」

「なにもない？」

「ありません」

「数は？」

「ピッタリです」

「いらっしゃい～相変わらずキレイだな～」

三山明が顔を見せた。

「会社のチャンピオンですって？」

「たまたまです」

「よしこさん倉庫見てもいい？」

「一緒に行きます」

人は、よいしょされてよろいができるのかもしれないと思った。

「わたし一緒に足利工場に行きます」

「心配なの？」

「心配はないんですけどデザインの人とも話したいし」

「桐内さんごはんでも」

三山明の誘いだったが、忙しいからと言って断った。

「桐内さん明日の15時にユノンオフィスに行きますけど」

「田部さんも一緒に行ってくれるんですか？」

「行きます」

「承知しました」

７月21日だった。

「おはよう」

「おはよう」

「コンビニコーヒー買っておきました」

「わたしも買ってきたから赤木君どうぞ」

桐内まつみは、机の上のコンビニコーヒーを赤木雄介の机に持って行った。

そして、買ってきたコンビニコーヒーを飲み終わるまで、コンビニコーヒーから離れない。
「田部愛さんが来てほしいって言ってました」
「朝？」
「ええ」
桐内まつみは、コンビニコーヒーを持って田部愛の机に向かった。
「なにか変更ですか？」
「15時のまま」
「承知しました」
「桐内さんちょっといい？」
田部愛は桐内まつみを給湯室に連れて行った。
「これどうしたの？」
７月15日の夜先里東方に助けてもらったのだが、桐内まつみの横で、先里東方も座り込んでいる写真である。
「わたしを助けてくれている人です」
「一緒に酔いつぶれた人じゃないの？」
「これは？」
７月16日にベトナム料理を先里東方と食べている写真である。
「お父さんには見えないけど」
「わたし会社で何度も睡眠導入剤を飲まされてるんです」
「ここにあったインスタントコーヒーとか机の下に置いてあったカップ麺とか」
「帰りに歩いていて眠くなって倒れるんです」
「先里東方さんは信用できるから電話するんです」
「先里さんっていうの？」
「ええ」
「15日もなの？」
「オレンジジュースだと思います」
「だれがやってるの？」
「わかりません」
「だから誰とも一緒にごはん食べないしいただいたおかしも食べません」

「なんなの？」
「この写真はどうしたのですか？」
「今日の朝わたしの机にあった」
「信じてください」
「誰かに話した？」
「話すともっとワルクなるかもしれないから」
「アパートにも侵入されて指紋認証のカギを付けたんです」
「信じられない」
「だから話したくないんです」
「だいたいこんな写真を撮るんだったら桐内さん助ければいいのに」
「この人が犯人ね」
桐内まつみは、ほほを熱いものが流れるのを感じた。
ずっと緊張していてなみだなど流してはいけないと思っていた。
「信じてください」
「15時に田部さんの机に行きます」
「わかった」
田部愛と桐内まつみは、蒲田のュノンオフィスに向かった。
「桐内さん犯人にめぼしはついているの？」
「ゼンゼンです」
「わたし赤木雄介さんと同期で隣に座ってるんですけど」
「赤井君は社内の女性に人気があるからわたしを離そうとしてると思ったんです」
「この人かもしれないと思った人も、睡眠導入剤を入れられた時に会社にいなかったりして、なかなか見つからないんです」
「女子社員なの？」
「多分」
「赤木君と桐内さんはうさわあったからな～」
「今は一緒に食事にも行っていません」
「どう思ってるの？」
「わたしは殺されるかもしれない」
「なに言ってるの？」

「道路でばたっと倒れるから自動車に襲われると思うんです」
ユノンオフィスは、京急蒲田駅から海側に５分歩いたところにあった。
「やっと１／10モデルができあがったところです」
湯浅修二は、作業場に案内してくれた。
「桐内さんのイラストのとおり正確につくりました」
横70センチ縦20センチの小さな滝だった。滝の上と下に水のプールがある。
「実物はこの10倍ですから横７メートル縦２メートルになります」
「ポンプを動かします」
下のプールから上のプールに水を上げると、上のプールの水が溢れて滝に流れ込むし仕組みになっている。
「今10リットルの水を使っています」
「滝のようには見えません」
「もう10リットル入れます」
滝といっても90度の滝ではない。最高でも80度である。45度もある。横に７つの滝が並んでいる。瀑布ということではない。
20リットル入れると滝のように見える。
「この10倍の２００リットルの水が流れるように用意します」
「この仕事を請けるのですか？」
田部愛が聞いた。
「下に２００リットルのプールをつくればいいことがわかったので」
「ありがとうございます」
７月22日だった。
マイフレッシュの展示会である。
外井三郎は早朝から下働きで出かけている。
桐内まつみは、どこかでお昼を食べて展示会に行くつもりである。アガテがどうなっているのか楽しみだ。
「今晩空けてください」
赤井雄介の顔を見た。
「わたし展示会に行かないといけない」
「わたしの商品」

「帰りでいいです」
「赤井君とはうわさになってるからごはん食べない」
何度言っても赤井雄介は誘ってくる。意味がわからない。桐内まつみはそれどこではないのだ。睡眠導入剤のオンナから自分を守らないといけない。
12時になって桐内まつみは、中野駅に向かった。有楽町の展示会の会場に向かっている。
ホームへの階段を昇っているときに足がもつれて手をついた。
「もしもし」
「どこですか？」
「中野駅の中央線のホームです」
「危ないから階段を下りて座ってください」
桐内まつみは、手すりにすがって下まで降りて、通路の壁にもたれて座った。
「ホームから降りてよかった」
誰かの肩に担がれているようだった。
「すみません～急病人なので」
「救急車呼びますか？」
「ストレッチャーありますか？」
「あります」
「少し寝かせておいていただけますか」
桐内まつみは、先里東方が来てくれたこと知っていた。
「いつもすみません」
「すごい眠いです」
「なんですか？」
「オレンジジュースしか飲んでいません」
「自動販売機の缶ですか？」
「ええ」
桐内まつみは時計を見た、14時30分だった。
立ち上がって汚れていないか見てみた。
先里東方はいなかった。
「気がつきました？」

「お騒がせしました」
「助けてくれた人はどうしました？」
「バックの中にメロンパンがあるって言ってくれでした」
桐内まつみはバックを調べた。財布もスイカもスマホもある。紙袋にメロンパンがあった。
丁寧にお礼を言って、中央線のホームに向かった。中央線の座席で、メロンのパンを食べた。なぜだか、なみだがポロポロ流れ落ちた。お腹がすいていた。
マイフレッシュの展示会は大きい。
桐内まつみははじめてだった。１周回ったと思ったのだが、北条食品のブースを探せなかった。
「桐内さん？なにしてんの？」
思ってもみなかった。山際聡子からだった。
「そこの角を右に曲がって」
「真ん中のちょっとわかりにくいとこにある」
やっと見つけた。
大きなアガテの文字が躍っていた。
後から山際聡子がきた。
「トイレ行ったらあんたがウロウロしてたから」
「どうもすみません」
「アガテ食べたことがないでしょ？」
山際聡子は、１箱持ってきた。
「これ明日の朝食べて」
「これは箱をバラしたサンプルで配ってる」
「食べてみて」
桐内まつみは、言われたとおり、アガテの６個入りの箱をバックにしまって、サンプルを食べた。
はじめてである。おいしかった。
10人くらいで商品説明をしている。
「大丈夫？」
「おいしかったです」

「追い込みだからあんたもサンプル配って」
「バック背負ったままでいいからこのエプロンして」
桐内まつみは、山際聡子に言われるまま、エプロンをして、サンプルを配りはじめた。
「ここの前はいいからこの籠持って向こうに行って」
桐内まつみは化粧室に行ってくればよかったと思った。
「平気～あんたわたしが嫉妬するくらいキレイ」
桐内まつみは、商品説明はできる。30分で10籠のサンプルを配った。
桐内まつみはどんな質問にも答えられた。
「桐内さんもういい」
「ありがとう」
「こちらこそありがとうございます」
「これ新製品のレトルトパスタ」
「重いけど」
「いただいていいんですか？」
「紙袋とって」
「片づけあるから忙しいから」
「手伝います」
「人数いるから帰って」
「アガテはヒットするから」
「ありがとう」
桐内まつみは、山際聡子に追い返された。向こうで外井三郎が見ていた。頭を下げて、そのまま出口に向かった。
なぜだか、なみだが溢れた。
「わたしは中央線でメロンパンを食べながらなみだを流しました」
「わたしが係わった商品の展示会で、いじめられていた人に親切にしてもらって、サンプルを１箱いただいて帰りました」
「またなみだが溢れました」
「『なみだってなんだ』を読んでください」
「なみだは、こころがよろいに占領されたら困るので、愛が、作戦として流させるものです」

「なみだが流れることは、桐内さんのよろいが薄くなっていることでもあります」
「明日はオレンジジュースは止めてください」
桐内まつみは、もう何年もなみだを流したことがない。
『なみだってなんだ』をダウンロードした。
７月23日だった。
「テレビコマーシャルの意見を聞きたいから集まってください」
「昨日の展示会で会社をあげて取り組むことになったのだそうです」
「北条食品さんには明日見せます」
「昨日の展示会で公開していますがみんな見たことがないでしょうから」
夜中にメールが入っていた。
「桐内さんおはよう」
「昨日はお疲れさまでした」
「10時に出るから」
「わかりました」
「もしかしたらすごいヒット商品になるかもしれない」
「そうなったらうれしいです」
「山際聡子と仲直りしたのか」
「わたしは何もしていません」
「なんで急に桐内の世話をやくのかわからない」
「なんで急にかわいくなったんだ？」
「わかりません」
「ごめんなさいしたのか」
「いいえ」
「アガテヒットしそうだから桐内に感謝してるのか」
「わかりません」
「ヒットしなかったらまた桐内をいじめるのか」
「わかりません」
「わかんないのはこっちだ」
外井三郎は疲れた様子でブツブツ言いながら出て行った。
10時になってトイレに行って帰った時、机の上にヨーグルト飲料が置いて

あった。
「これ赤木君なの？」
「朝ここの前で配ってたから」
「どうもありがとう」
桐内まつみは、バックを背負って机の上をパソコンだけにして、ヨーグルト飲料を持って外井三郎の机に向かった。
桐内まつみは、バックから紙袋を出してヨーグルト飲料を包んだ。途中のコンビニで捨てるつもりである。
「昨日山際聡子に親切にされたんだって？」
海老名一郎が話しかけてきた。
「少し手伝わせていただきました」
「顔も見たくないだったのに」
桐内まつみは、返事をしなかった。
玉野久三と久野豊と牧川久則と海老名一郎と外井三郎と桐内まつみである。
15秒バージョンと30秒バージョンである。ネットの広告も同じものにする。
「何か気になるところはありますか？」
10回くらい連続で見て、玉野久三が言った。
「桐内さん気になるところはありませんか？」
「ないと思います」
「じゃ～これで局に渡します」
「９月１日に80万箱出荷しますので９月10日から全国ネットです」
お昼時間になった。久野豊が弁当を運んできた。桐内まつみは迷った。
半分食べることにした。最悪の場合でも眠くなるくらいだろう。
「調子でもワルイのですか？」
「ダイエットです」
「ウソでしょ？」
「口に合わないかと思って」
「すごいおいしいです」
「ごちそうさまです」
帰りの電車の中だった。

「この前の写真のこともあるんだけど」
「調子よくないのですか？」
「絶好調です」
「弁当半分しか食べなかったけど」
「山際聡子さんからいただいたアガテを６個食べてきたから」
「アガテを１度に６個食べる人なんかいない」
桐内まつみは不思議だと思った。
山際聡子からもらったアガテを疑いもなく食べている自分である。
誰も信用できないのにである。
15時に中野に帰った。

○レッドカード４枚

机の上にレッドカードが４枚貼ってあった。
「赤木君これなに？」
「ああ～気がつきませんでした」
メモも何も書いてないことを確認してゴミ箱に捨てた。
「仕事で出かけて今帰ったらレッドカードが４枚貼ってありました」
「今日やるつもりですから注意してください」
先里東方からアッという間に返事が返ってくる。
パソコンも変化はない。なにもない。
「おさきに～」
17時になって桐内まつみは、中野の会社を出た。
コンビニに寄ろうと思って道路を渡ろうとした。誰かがガツンと背中にぶつかって桐内まつみは道路に投げ出された。急ブレーキが聞こえてダメだと思った。
「大丈夫ですか？」
運転手が降りてきた。
「大丈夫ですか？」
「当たりました？」
３人くらい集まってきた。

「起きれますか？」

左前輪が右手のシャツにかかっていた。

「はさみありませんか」

「車動かさないほうがいい」

「腕を噛んでるんですか？」

桐内まつみは、自分でよくわからない。

コンビの店員がはさみを持ってきてシャツを切った。

桐内まつみは、横に転がってみた。

「救急車来ますから」

桐内まつみは立ち上がった。

「誰かぶつかったんですけど見ませんでした？」

「中野駅の方に走って行った気がするけど」

「誰かが追いかけていました」

「わたしは平気です」

「救急車で診てもらってください心配だから」

「シャツを噛んでいた車の運転手はしきりに言った」

救急車がすぐにやってきた。

「車道に倒れてギリギリだったのでどこか当たってないか調べてください」

「運転手は自分の名詞を桐内まつみと救急隊員に渡した」

「一緒に行きます」

先里東方だった。

「調べてもらった方がいい」

桐内まつみは仕方ないという素振りで救急車に乗った。先里東方も乗った。

21時になっていた。

「ゼンブ調べましたけどどこも何もありません」

「念のために泊まって行った方がいいと思いますけど」

親切にしていただいた救急病院の担当の方を振り切って、桐内まつみは、アパートに帰った。

「どうぞ」

「狭いアパートですけど」

桐内まつみは、アパートまで送ってくれた先里当方を招き入れた。

宅配ピザを頼んだ。
「今日やるつもりですから注意してくださいと言われていたのに残念です」
「睡眠導入剤しか警戒していなかったから」
「殺人未遂ですよね」
「そうまでしてわたしが憎いんですか？」
「ええ」
「このままでは殺されそうです」
「桐内さんのよろいも厚いからです」
「そこがよくわかりません」
「わたしのよろいが厚いとは思えません」
「桐内さんは気がつかないかもしれないけど、よろいが出す雰囲気というものがあります」
「どうすればいいですか？」
「明日何か用事がありますか？」
「あります」
「誰かと会うのですか？」
「いいえ」
「午前中は休めますか？」
「ちょっと車と接触して病院に寄っていた」
「診察してくれません」
「病院に行かなくてもいいです」
「意味がわかりません」
「桐内さんがガンバるから意地になってる」
「少しは弱ったところを見せないとエスカレートします」
７月24日だった。
「ちょっと車で接触しました」
「なんでもありませんが病院に寄って行きます」
「襲われたの？」
「13時に出社のポストイットを貼っておいてただけないでしょうか」
田部愛に電話をした。田部愛には話をした。味方かどうかわからないが、知らせておこうと思った。

桐内まつみは、少し悩みがある雰囲気を演技した。
「おさきに～」
田部愛が１階で待っていた。
「昨日も睡眠導入剤なの？」
「後からドスンです」
「車道に倒れて危ないところでした」
「わたし送って行こうか？」
「今日はレッドカードなかったから平気だと思います」
「レッドカードって？」
「赤のポストイットが昨日は４枚貼られていたんです」
「机？」
「危ないと思ったんです」
「今日はなにもありませんので」
８月１日だった。
１週間、桐内まつみは、悩み多きオンナを演じた。エスカレートするから少しは悩んでいる態度を示せという先里東方のアドバイスを受け入れている。悩み多きオンナを演じると、普段の自分が、競争に明け暮れる自分のように思える。
そういうつもりはないのだが、ずっと競争だった。そういうつもりはないのだが、競争で何でもが決まってしまうような雰囲気である。
「もしもし」
「桐内さんですか？」
「王内よしこです」
「北条食品の足利工場にいます」
「今日からアガテの生産です」
「また連絡します」
留守電だった。
お昼休みを見計らって電話をした。
「もしもし」
「桐内さんバッチリです」
17時になって、桐内まつみは、中野駅に向かった。中野駅から帰りはじめた

何も起こっていない。
８月５日になった。
相変わらず、桐内まつみは、沈んだ雰囲気をかもし出している。悩み多きオンナである。
「今日サカイ食品にトマトと人参とほうれん草の夏カレーのパッケージを各40万箱出荷しました」
サカイ紙業の森野芳郎から電話があった。
仕事はきわめて順調である。
外井三郎がやってきた。
「８月10日から夏カレーを出荷するらしいから大阪に行ってくるから」
「いつ行くのですか？」
「８月10日だ」
「よろしくお願いします」
「仕事がみんなうまくいってるけど浮かれて飲み過ぎるなよ？」
桐内まつみは返事をしなかった。
８月11日だった。
「桐内さんおはよう」
「おはよう」
「サカイ食品は昨日からトマトと人参とほうれん草の夏カレーを出荷しました」
「サンプルもらってきたから」
「プレゼンルームの展示棚に飾ってください」
「この３つは桐内さんが食べてみてください」
外井三郎は、桐内まつみに対して、バカ丁寧な時もあれば、先輩ぽく話す時もある。今日はバカ丁寧だった。
「桐内さんは夏休みはどうするんですか？」
「まだ決めてない」
「山にでも行きませんか？」
「赤井君とはうわさになるから行かない」
「さっきの夏カレー１つくれませんか」
桐内まつみは、バックから人参を出して渡した。

「人参平気なの？」
「平気です」
桐内まつみは、13日から剣岳に登ろうとしている。単独である。バイクで黒部に入って、黒部ダムから室堂に入って剣岳直下で小屋に泊まって次の日早くに剣往復をするつもりである。
桐内なつみの足だとなんでもないのだが、油断をすると滑落する危険がある。
女性の登山者が少ない。
８月13日の３時だった。
「剣岳に登ってきます」
「最近は、悩み多きオンナを演じていることもあって何も起きません」
「犯人がわからないので毎日注意しています」
「何かアドバイスがあったらお願いします」
「ケータイにお願いします」
車は混んでいるかもしれないと思っていた。13日の早朝である。早朝というより夜中である。以外にスムースに走れた。天気は快晴である。
室堂から雪渓を越えて剣岳直下の小屋に着いたのは16時30分だった。まだ日は高いのだが、山では遅い時間である。
小屋に泊まって小屋の食事をいただく。
「悩み多きオンナの演技でちょうどフツウのオンナでしょうね」
「よろいが隠れることですが」
気がつかなかった。
先里東方からメールが入っていた。
謙虚にしていろということかもしれないと思った。
８月14日だった。
朝３時に出発した。
桐内まつみが出発したわけではない。みんな出発した。特に剣は、早朝の天候が安定している。午後になると谷から雲が湧き出てくる。
ヘッドライトがなかったら歩けない。
朝ごはんは食べてない。お弁当にしてもらっている。どこかで休憩の時に食べないといけない、疲れると何も食べたくなくなる時がある。

登り始めは銀座のようだったのに、頂上ではバラバラである。６時と頂上でおにぎりを食べた。快調である。
一気に室堂まで降りてきた。桐内まつみは強い。どんどん追い抜いていく。
日本で１番高い場所にある温泉に入ってビールを飲んでパスタを食べた。
お金がないわけではないが、畳の食堂にシェラフで眠った。
８月15日だった。
桐内まつみは、ゆっくりと歩いて、オートバイまで帰ってきた。
ホントにゆっくり走った。
アパートに着いたのは17時だった。
メールも何もない。楽しい満足できる剣岳だった。
回転すしでテイクアウトをした。
ビールを買った。
「剣岳から帰ってきました」
「元気です」
「明日からまた悩み多きオンナをやります」
どういうわけだか、先里東方にメールをする。
「おつかれさま」
これだけの返事なのだが、アッという間に返事が来ることに安心する。
お父さんでもないのに、お父さんより親身である。桐内まつみの味方をして世話をしても、何の得にもならない。わけがわからない。
「わたしを助けてくれていますが、何の得もないのですが、それでいいのですか？」
「お礼を要求することはありません」
「人の欲には、私欲と周辺欲があります」
「私は、自分の周りが幸せになってくれればうれしい」
「私欲はゼロです」
「私の欲だから身体が動いてしまいます」
わけのわからない返事がすぐに返ってきた。
そしたら、自分は先里東方の周辺の１人ということになる。
ビールを飲みながら、握りすしを摘みながら考えてしまう。
自分は、周辺を幸福にしたい欲などないように思える。周辺の１人に殺され

そうになっている。
８月18日だった。
「メインブースが完成しましたが見ませんか？」
「岩などはまだ塗っていませんので機能と構造だけを見てください」
「滝が壊れないで流れ続けるかどうかです」
「朝10時から17時まで連続運転します」
桐内まつみは、急いで田部愛の机に向かった。
社長と相談中になっていた。
「先に行きます」のメモを置いて蒲田に急いだ。
最近は、レッドカードもない。睡眠導入剤もない。桐内まつみは、伏せ目がちに悩み多きオンナを演じている。このまま収まるのだろうか。睡眠導入剤のオンナが特定できないままである。
「ああ～すごいですね～迫力がある」
「バランスが崩れると水が流れて展示会全体が水浸しになります」
桐内なつみも田部愛も湯浅修二もリスクを負っていることになる。
桐内まつみは、10時から17時まで見ていようと思った。
12時に田部愛がやってきた。
「心配で見てるの？」
「わたしハンバーガー買ってきたけど食べられる？」
「コーヒーもあるから」
「いただきます」
「わたしが買ってきたのは食べられるの？」
「ええ」
「じゃ～どうぞ」
「いただきます」
「コーヒーもあるから」
「ありがとうございます」
「桐内さんはずっといるの？」
「今日はそうします」
「わたし１時間したら帰るから」
「わかりました」

「今のところ平気なの？」
「バランス崩れません」
「そう」
桐内まつみは、18時になって、蒲田のュノンオフィスを出た。蒲田駅のスーパーマーケットに寄ってトマトの夏カレーを買った。お店の人に聞けなかったが、売れている雰囲気はあった。
最近は、１日おきに夏カレーを食べている。
９月１日になった。
アガテの発売である。
テレビのコマーシャルが流される。
桐内まつみは、歩いて高円寺のアパートに帰った。最近は、警戒していることもあるが、桐内まつみが攻撃されることことがなくなった。もっとも、悩み多きオンナを演じているので、やる気も失せるのかもしれない。
アガテは、まだどこにもなかった、しかし、19時前に30秒のコマーシャルを見た。新鮮だった。
９月３日のお昼だった。中野駅のスーパーマーケットでアガテを買った。２つ買って１つは会社の展示棚に飾った。１つはお昼にした。６個ある。外井三郎と赤井雄介と田部愛と浜野きよみと結城麻衣子に配った。
朝は、これ１つで足りてしまうと思った。
桐内まつみは、９月６日と７日のデザインブースの準備をした。
メインブースは、桐内まつみがスピーカーをやることはない。しかしデザインブースは来ていただいたお客さんにしっかり説明をしないといけない。夏商品である。夏商品パッケージである。
荻窪にあるオフィス真二に協力してもらっている。30万円すべてを使った。俵真二がやっている。荻窪のアパートの１室でやっている。すごい技を持っていて、本物そっくりのパッケージの見本をつくれる。30の夏商品のパッケージをお願いしている。
「もう置き場がないから持って行ってくれ」と言われて、桐内まつみは、自分の高円寺のアパートに16種類のパッケージを持って帰った。今日は８つ持って帰るつもりである。サンタクロースのような大きな布袋を持っている。

「こんにちわ～」
メールをしておいた。電話は通じない。16時なのに眠っている気がする。朝方の７時頃が１番活性化していると言っていた。
１度俵真二の部屋に入ったことがあるのだが、座る場所がないし汚い。玄関で話して玄関でパッケージ見本を受け取っている。
「おはようございます」
「どうぞ」
起きたばかりの雰囲気だった。
「わたし襲われそうだから入りません」
「睡眠導入剤飲んでるから襲う元気がありません」
「眠れないのですか？」
「冴えてる時に寝ようとするから睡眠導入剤がないとムリなんです」
「朝から仕事すればいいじゃないですか～」
「やる気が起こりません」
「すみません～この袋に入れてください」
「持って帰ります」
「明日また来てください」
「ゼンブ仕上げておきます」
「わかりました」
ゴミ箱のような俵真二の部屋から本物かと見間違うようなパッケージ見本が出てくることが、すごく以外である。

○レッドカードを４枚貼った人

９月６日だった。２０１４マカノクリエイト展示会である。
桐内まつみは、８時の朝礼に間に合うように、７時30分に東京駅近くの展示場に着いた。
１番心配なのはメインブースの滝の水のバランスである。モーターが止まったりしてバランスが壊れると、会場が水浸しになる恐れがある。
「９時30分に運転を始めます」
湯浅修二が言った。デザインブースは、田部愛が会場展示の一環で桐内まつ

みの30種類の夏商品の展示をやってくれた。机がむき出しといったことにはならない。桐内まつみは、30万円すべてを夏商品のパッケージ見本に使った。
40インチの液晶モニターも会場展示の予算の中で賄ってくれた。
滝の水辺の映像を流してみた。
ピッタリよくはまる。
ちょっとした事件があったのは９月７日だった。
メインブースからかすかに滝の流れる音が聞こえているのだが、急にパタっと止まった。
桐内まつみのブースにはお客さんが多いのだが、メインブースに向かって走った。
滝が止まっていた。
「もしもし」
「湯浅さんですか？」
「滝が止まっています」
「すぐ行きます」
まだ11時30分だった。
みるみる下のプールの水かさが増えてきた。
「誰かスイッチを切りました？」
「それより水が溢れます」
「大丈夫です」
「下のプールを大きくしましたから」
「下のプールにすべての水が入るようにしたんです」
「プールが壊れない限り水は溢れません」
桐内まつみは冷や汗をかいた。
「誰がスイッチを切ったんでしょうね」
「スイッチはどこにあるんですか？」
「パソコンです」
「滝の映像ですか？」
「滝の映像も流れなくなっています」
「誰かがパソコンの電源を切ったのですか？」

「入れます」
滝のスクロールの映像と滝の水が同じスイッチだったとは気がつかなかった」
米田やすこも結城麻衣子も赤井雄介も展示会の応援をしている。46人全員が展示会をやっている。
18時30分になって、搬送物を中野に送る手配をして、残りはユノンオフィスにお願いすることになって、全員で終礼をした。
社長の野中俊二が言った。
「はじめての展示会でしたが、上々でした」
「お客さんの話も、マカノクリエイトがチカラをつけたことを認めてくれていました」
「全員が一致協力して展示会を成功させたことを誇りに思います」
「それでは、お客さんが投票したベストブースを発表します」
「私の意見ではありません」
「お客さんの投票です」
「３位は浜野きよみ服飾ブースです」
「２位は桐内まつみパッケージブースです」
「１位は桐内まつみメインブースです」
桐内まつみは、頭がクラクラした。
「賞状も盾も賞金も用意していませんでしたので、私のポケットマネーで申し訳ないのですが、それぞれ10万円を受け取ってください」
「皆さん全員に感謝します」
桐内まつみは、ずっと悩み多きオンナを演じている。野中俊二から金一封を受け取るとき、「もう笑ってもかまいません」と小さな声で言われた。
なんの意味がわからない。そう言われてニコニコできるわけでもない。
みんなにおめでとうを言われてパッケージ見本をしまうヒマもなかった。
19時になって、湯浅修二にお礼を言った。
「おめでとうございます」
「夏商品の注文をいただいたんですって？」
「３社からいただきました」
「みんな湯浅さんのおかげです」

「打ち上げをやりたいのですがまた日を改めて」
「ありがとうございます」
桐内まつみは疲れた。
東京駅からそのまま高円寺で降りようと思った。
「後に気をつけて」
先里東方の声だった。
ドンと誰かが当たって桐内まつみは下り中央線のホームに墜ちた。
瞬間に顔を見た。
駅員と先里東方がやってきて引き上げてくれた。
「電車が１分30秒おきに来てるのにラッキーでした」
桐内まつみは顔を見た。すごいショックなのだ。
「高円寺のベトナム料理のお店に付き合ってください」
桐内まつみは、返事をすることもできなかった。
「ウーロンハイにしてください」
「２つ」
何も話さない桐内まつみにかまわずに、先里東方は料理を頼んだ。
「ベストブースに選ばれておめでとう」
どうして先里東方が知っているのかわからない。
何も考えたくなかった。
「顔を見たんですね」
返事をしたくなかった。
「明日退職します」
「もし桐内さんが許してくれるのでしたら、黙って退職させたい」
「それは、社長の野中俊二さんも同じ考えです」
「私が野中俊二さんに睡眠導入剤のことを話しました」
「レッドカード４枚を貼った人を監視カメラを設置して特定してくれました」
「私は、俵真二さんから話を聞きました」
「睡眠導入剤を分けてくれ」
「私は、本人にも話しました」
「でも、今日のような桐内さん見ていると、嫉妬が抑えられなくなります」

「桐内さんの近くにいることが好ましくありません」
「殺人未遂です」
「どうしてわたしに嫉妬するんですか？」
「自分のよろいの方が素晴らしいはずなのに、桐内さんが称賛されることが受け入れられません」
「最近ショッキングな出来事が続きました」
「今日は危ないと思いました」
「展示会にいたのですか？」
「誰が滝のスイッチを切るのか見ていました」
「わたしはどうすればいいのですか？」
「いまのままがいいと思います」
「悩み多きオンナを演じることですか？」
「昨日まで何もなかったんです」
「桐内さんが謙虚だと何も起きないんです」
「今日は消えていた嫉妬心に火が着いたんです」
「桐内さんへの嫉妬です」
「なんでかわかりません」
「桐内さんより優秀だと思っているんです」
「東京駅からわたしの後にいたのですか？」
「危ないと思っていました」
「明日からはどうして平気なんですか？」
「同じ土俵にいなかったら嫉妬はないんです」
「桐内さんは有名人ではないので、一方的な嫉妬がありません」
「桐内さんへの嫉妬は同じ土俵の人しかありません」
「よろいとよろいがぶつかるんです」

『嫉妬ーまつみのよろい』

２０１４年

げんじあきら

よろいについては、『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『心棒ー朗人のよろい』『虐待ーさじのよろい』『いじめーゆいのよろい』『無視ー太田垣のよろい』『隆家のよろい』『追従ージンのよろい』『パクリー向井坂のよろい』を読んでいただきたい

嫉妬ーまつみのよろい

著者　　　げんじあきら
発行者　　げんじあきら
発行所　　いしかわオフィス

東京都小平市小川町２－１１７２－１－２０２
ＴＥＬ　０９０９８３１０６１９
genji@gb4.so-net.ne.jp